
Virtual Mind -Bondage Conect Online

迷音ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Virtual Mind - Bondage Connect
Online

【ZINEID】

Z0360T

【作者名】

迷音ユウ

【あらすじ】

201X年。世界初バーチャルリアリティ技術を駆使した、仮想空間を体験できるオンラインアーケードゲーム「Bondage Connection Online」通称BCOがテスト版として公開された。テストプレイヤーに選ばれたのは、PC版BCOをプレイしていた15歳以上の人々。ある日、高校2年の疾風はBCO、バーチャルリアリティアーケード版のテストプレイヤーに選ばれる。疾風は喜び、テストプレイに向かう。しかし、テストプレイのさなか、システムが暴走をはじめ・・・

(（アツトノベルスよりお引越し））
！一ヶ月半以上も更新できずにつみません。ゆっくりですが、再開
していきます！

プロローグ（前書き）

中一のころに思ついたものを、ソーディアートオンラインを基にして練りました。ほとんどA4のばくつのやつなものです、よろしくおねがいします。

プロローグ

序話

自分のHPヒジットポイントを示すバーがもう、三分の一を切っていた。通常緑色のそのバーは、今、警告色である赤色になっていた。危険だ。ハヤテは今、大型の竜とたつた一人で対峙していた。黒い鱗をもつその竜はところどころ骨が見えている。その見た目はゾンビを思わせる。

『アンデットドラゴン』LV??。

この敵は『ボス』なのでレベルは倒すまで表示されない。「？」が三つあるところをみると、少なくとも100レベル以上なのだろう。ハヤテのレベルは114。中世のヨーロッパを感じさせる鎧を身につけ、きれいな装飾の、柄が金色の剣を握っている。おそらく、このレベル、装備を総合した能力値なら、このドラゴンを上回っているとは思うのだが、このドラゴンは厄介なところがある。

それは、回復能力。アンデットとだけはあって「不死」を感じさせる驚異的な回復速度。幸い、三分の二以上は回復しないようだが・・・。こういう敵は大人数で一気に攻めるのがよい。しかし、今は一人だ。さっきまで一緒に闘っていたパーティプレーヤーが三人いたのだが、一人は「回線落ち」し、あと二人はドラゴンの魔息ブレスにやられた。ドラゴンの魔息ブレスは魔法攻撃判定。しんだ二人は物理専門の職で、魔法攻撃に弱すぎた。結局一人。

疾風はハアとため息をつき、チャットウインドに文字を打ち込む。死んで、ゴースト状態になり見学しているパーティーメンバーに、承諾を得て、疾風は一時停止アイテムボーズを使つた。ボーズアイテムは

とても高価で滅多に手に入らない。このまえひょんなとこで手に入れた。まあここで使うのは惜しくはない。

画面が暗くなり、静止する。

オンラインゲーム「Bondage Connect Online」
。通称BCO。
ビージーオー。

仲間と戦うことを再前提として作られた、ソロプレイヤーにあまり優しくないゲーム。

もともと、四人で行くのも結構無理があつたのだ。このボスを倒すための推奨人数は六人。自分たちの力を過信しそぎた。疾風はパソコンの画面をこつこつとたたく。

「さあて、どうしようかな・・・」

とりあえず疾風はポーズ時間の限界である五分の間に作戦を立てることにした。26時32分・・・別に眠たくない。徹夜ももうなれたものだ。冬休みに入つて二日目。ほとんど寝ていない。

BCO、PC版がサービス開始になつてからもう、一週間がたつ。

BCOの人気は半端がなかつた。まだ一週間にもかかわらず登録数は一万を超えていた。特に特徴のないこのゲーム。なぜこんなにはやつているのだろう。普通にキャラクターが剣、魔法を使い、仲間とともに敵を倒して、レベルを上げていくゲーム。まあ人気の理由はおそらくあの二つだろう。

一つ目は、超がつくほど美麗なグラフィックス。有名CGデザイナーを総動員し、最新のCG技術が使われている。その美しさ、リア

ルさといったら、本当に感動する。しかし、それのおかげで、低スペックのパソコンではまったく動作せず、B COO専用パソコンが多数売られているほどだ。

「一つはゲームのボリューム。とてつもない数の、モンスター、武器、魔法、そして、ステージ。その無数ともいえる数がゆえのゲームのやりこみ度の高さ。

まあこの「一つ」がたくさんプレーヤーが集まった理由だろ?。「いや、あとひとつあった。おそらく全プレーヤーがこのゲームを始めた理由を……。

疾風が頭につけていたヘッドホンからピピッ、という音が聞こえてきた。ポーズ時間が残り十秒になつたことを示す、警告音だ。

「あ・・・何にも考へれてない・・・」

十秒がたち、画面の暗転がとけた。再び、ボス戦が始まる。ちょうどその時だった。チャリンといつ音が鳴り、画面の下にポップアップが出てきた。

マナさんがログインしました。

(マナだ!)

疾風はアンテナードラゴンの攻撃を器用によけながら、さりとポップアップをシングルクリックする。画面下に今度は、確認ウインドウが出てきた。

フレンドコールしますか？ Yes / No

疾風は迷わず Yes を押した。

「フレンドコール」とはその名のとおり、フレンド呼ぶことができ
るシステムだ。パーティーメンバーが上限に達しておらず、なおかつ、そのフレンドがオンラインフィールド（フィールドに出ている状態）
以外のときに使える。呼ばれたほうはそれを承諾する」と、呼んだプレイヤーの元へ瞬間移動する。^{テレポート}

ほとんどの間もなく、そのコールは承諾された。ハヤテの近くに魔方陣が展開され、それは光りだした。約三秒後、そこには人影があつた。彼女がマナだ。動きやすい、軽防具を身につけ、手には西洋剣『ドレスソード』。銀色の長い髪が特徴だ。といつてもアバターなのだが。

『ログイン早々呼び出しで、なにかとおもつたら、ADなんかで手間取っちゃってんの?』^{アンダーティング}

『むつ』

このゲームの話す手段は文字チャットだ。音声チャットは、ゲーム容量の関係で実装されていない。

この上から田線の彼女とあつたのは四日前だった。

疾風がBCOをプレイし始めて二日のことだつた。比較的初期はレベルの上がりやすい仕様になつてるので、ハヤテのレベルはす

でに40レベルだった。その日は、ちょうどいいパーティもなく、BCOとしては珍しいソロプレイによる、フィールドダンジョンをしていた。

しかし、ダンジョン中、ある森の中に入つたときのことだった。そのエリアでSランクのレアモンスター『ゴールドゴブリン（GG）』が出てきた。レベルは49。しかも、このモンスターは物理防御力が高いので有名だ。小型のモンスターのくせに、通常は一人で狩るようなモンスター。しかも、しかもだ。運がいいのか悪いのか、GGは同時に二体現れた。疾風はテレポートキーを使おうとおもったが、GGのパッシブスキル『逃走不可』でそれは妨げられた。

GGの猛攻に、ハヤテのHPは残り一割にまで減らされた。そのとき、ちょうどビソロプレーヤーが来た。そのプレーヤーがマナだった。マナはGGにもてあそばれているハヤテを見て爆笑していた。（といつてもチャットだが）

『そんな雑魚も倒せないの？　www私が倒してあげよつか？』

果てしなくうざかったのだが、このままでは死んでしまうので仕方なく頼んだ。

マナはその手に握る西洋剣^{レイピア}を振るい、その圧倒的な力で一体のGGを瞬殺してしまった。GGのポリゴンは黒い霧となつて、空間へ蒸発していく。あとに残つたのは、金色に光る直方体 レア金属『ゴールド』だ。

まあ、そのときフレンド登録したわけなのだが、なんだか悔しかつたので今、必死にレベルを上げている。

『さて、ちやつちやとちやつちやねづ』

マナは、武器ワインダウを操作すると、もう一本の剣を出した。長剣『カーテナソード』だ。SSクラスの激レア装備。それにしても二刀流。どうやらマナの職はソードマスターのようだった。最初見たときは、細剣使い（フロンサー）とおもっていたのだが。

『あなた、ＶＳでしょ？ 後方支援魔法よろしく』

マナはさう言つと、ADに向かつて駆け出した。俊敏度を上げているのか相当な速さ。

ハヤテはしぶしぶ援護に回る。ハヤテのクラスは万能戦士。よく言えば万能。悪く言えば器用貧乏。しかし、剣、魔法ともに使えるので、初心者に圧倒的な人気を誇る。まあ疾風がＶＳを選んだのもそれが理由なのだが。

ハヤテはすばやく呪文を詠唱する。詠唱時間はさほどでもない。すぐ、ADの下に、小さな魔法陣が現れ、次の瞬間、バチツと強くフラッシュショットした。それと同時に、ADの動きが鈍る。低級魔法『ライトニング』だ。効果持続時間は短いが、対象をマヒさせることができるのである。

『サンキュー』

マナはそう言つと、タツとドラゴンの顔に向かつてジャンプした。ADが魔息を吐いてきたが、マナはそれを空中回避する。そしてマナはドラゴンの顔めがけて、一本の剣を振り下ろした。とてつもない連續斬。カーテナソードの固有スキル『カーテナラッシュ』。初

心者が見ると、ただ剣を闇雲に振り回してるようにしか見えないが、実際この技は、タイミングよく、さまざまなコマンドを入力しなければ途中で止まってしまう。実際は七秒にもわたる大技だ。空中で発動する場合、位置が固定される。

ADのHPがみるみるうちに削られていく。

疾風は思わず息をのんだ。その剣技があまりにも美しく見えたからだ。

バーン！！大きな音を立てて、コンボの最後の剣撃があたると、コンボ数はたった一人で700を超えていた。さすが一刀流。

ググググガアアアアア

ADは回復する間も与えられず、その場へ倒れた。そしてシューといつ音を立てて、黒い霧となり空間へ散っていく。それと同時に壮大なファンファーレとともに、画面にQUEST CLEARの文字が出てきた。

ハヤテはあわててお礼を言ひ。

『ありがとな・・・任せちゃつて』

『いやいや一別にいいよー。ザコイ人を手伝つのも、上級者の役目つてね』

発言が力ちんとくるが、必死にそれを抑える。

『まあそれにはー。ちゅうど、ADの素材がほしかったし』

『・・・・・』

『やうだ、あとで私の「マイルーム」にこない? たまには雑談でも
しょーよ』

そういう残して、マナはどこかへテレポートしていった。おそらく
マイルームに行つたのだろう。

「雑談かあ・・・」

最近ひたすらレベル上げで、そんなことまったくしていない。・・・
たまには、息抜きにいいかもしない。疾風は画面を操作し、フレ
ンドリストを表示させる。パーティーを解散させた後、ハヤテはマ
ナのマイルームへとテレポートした。

プロローグ？

『よつじんち、私の部屋へ』

『・・・さつきはありがとな』

疾風は再びお礼を言った。

『全然大丈夫だって。それよりさー。あと三日でVRAC版のテストプレーヤーの発表があるよね』

『あつ、そうだつたな・・・』

このゲームが人気の最もたる理由。それは来年冬から稼動予定の、CBOのアーケード版のせいだった。その、CBOのアーケード版は、世界で始めて仮想世界ヴァーチャルワールドを人間の脳とリンクさせ、自分の体で といつても、精神だが でVRを体感できるシステムを採用したゲームだったからだ。そのテストプレイが一月にあるのだが、それに行くためにはこのPC版をプレイしていなくてはいけない。

『そりいえばあれって、抽選だろ?』

アーケード版のテストプレイは、十五歳以上のPC版プレーヤーからランダムに選ばれることになっていた。十五歳以上と制限があるのは、十五歳未満のVRの使用を世界的に禁止しているからだ。悪影響を及ぼすかららしい。

『それなんだけどね・・・噂によると完全にランダムじゃないらしいんだよ』

『じうこひじとへ。』

『それがねー・・・』

マナは自分のステータス画面を表示させる。今疾風はマナのマイル
ームにいるので、その画面は、疾風の画面にも映る。LV148・
・。

『おっ、おまえ・・・さうにレベルあがってんじゃんか』

前見たときは124レベルだったはずなんだが・・・。

『そりゃーレベル上げしてるから、レベルは上がるよ〜〜〜』

『・・・で噂つてのは』

『そりゃー、抽選はレベル150以上の人だけつて言つ噂』

『150!?!?』

このゲームの最高レベルは現仕様で300。150どころか・
・、その半分。

『その噂本当なのか?』

ハヤテのレベルは114。もしその噂が本当なら、急いでレベル上
げしないと、抽選もれする。しかし、あと三日で36レベルも上げら
れるのだろうか・・・。

『信憑性は高いとおもつよ』

疾風はハアとため息をつく。

マナはハヤテが急に無言になつたところから、おおよそ、今のハヤテの気持ちを読み取つた。

『私が、レベル上げ手伝おうか？速攻レベル上げの方法知つてるよ？』

ピロコーンという音が鳴り、画面に確認ウインドウが出てくる。

パーティーへの参加が依頼されました。参加しますか？

Yes / No

疾風は一瞬迷つたが、どうせ、あてもないのでYesを押した。

『じゃあ、行こう』

マナが言つと、疾風はいきなりテレポートさせられた。テレポート先は、レベル130推奨のダンジョンだつた。

『大丈夫かな・・・俺まだレベル114だし、正直きついぞ？』

『あ～大丈夫だよ。

経験値はパーティ分配式にしてるから。
放置してもレベルは上がるよ？』

『・・・といつてもな～』

『大丈夫だつて「アーツ洞窟」に行くからね』

「アーツ洞窟」はレベル140推奨ダンジョン。別名、竜の巣窟。ドラゴン系の大型モンスターが大量出現し、プレーヤーからは、S級危険区域とも呼ばれている。

疾風は再び心配になり、

『本当にいいのか?』

『大丈夫。

レベル160ダンジョンぐらじまでなら、ソロ狩りできるから』

マナのレベルは148。12レベも上のミッションをソロプレイできるとは・・・、恐ろしいほどの強さだ。まあ、実際に、マナはBCOの上位プレーヤーの中でも5本の指に入る有名プレーヤーだ。確かに、二日前に行われた、プレーヤー総合ランキングでは、4位だったような気がする。BCOの総合プレーヤーランキングは、レベルだけではなく、装備、所持金、今までの戦闘成績など様々な要素を数値化し、総合して割り出す。例えば、マナよりランキングが下でも、200レベを超えるプレーヤーはいるということだ。しかし、総合的にはマナに劣る。ちなみに、ハヤテは3968位だ。

と、自分の弱さを心中で噛みしめていると、

パーティ参加希望者がいます。

(参加希望者・・・?)

『このパーティ『開放』してたのか?』

『うん、そうだよ。

まあ、レベル制限150だけど、そっちのほうが効率がいいでしょ？わたしの得にもなるし』

それもそうだが・・・。

マナが言つと同時に、新たなパーティ参加者がテレポートしてきた。

ユウナさんのがパーティに参加しました。

『こんです！みなさん。

よろしくね』

近くに現れたのは、女性のアバター。マナとは違い、髪型はきれいな、スカイブル空色の短髪。装備は・・・、これはウイッチの服だろ？。どこかで見たような、魔女みたいな格好をして、魔女っぽい帽子を被っている。手には、なにやら、先のほうに宝石が埋まっている杖。完全に職はクラスウイッチW.I.C.のようだった。疾風も々々に見る、魔法専門の職。

『魔法職って珍しいですね』

ハヤテは、思い切つてユウナに言つた。

『そうかなー？

てか、丁寧語？やめてよ。タメでいいよー』

『あ、ああ』

実際、BCOにおいて、魔法職というのは珍しい。というのも、魔法職が初期のクラス選択時に選べないからだ。100レベル以上で

受けることができる、あるクエストをクリアしなければ手に入れることができない。しかも、攻撃力が低く、使いにくい。

『そういうえば、このパーティ一いつレベ上げだよね？何でこんなにレベルはなれた人がいるの？』

『どうやら、コウナはハヤテのことを見つけていたようだった。

『ああ、それは……』と、打ちかけたところでマナに先を越された。

『それはね、ハヤテ（こいつ）がVRAC版の抽選漏れしないように、後残り少ない時間でレベル上げるため。わたしが手伝つてあげてたの』

『なるほどー』

『まあそんなパーティーということなんだけど、コウナよかつた？』

『うん。別にいいよー。こつちはもう150超えてるし問題なし』

W

150越え……。この部屋の制限レベルが150だったから、そ
うなのは分かっていたが、改めて聞くとなんだかすごい。

『コウナは何レベなんだ？』

ハヤテが聞くと、コウナは自分のステータス画面を表示させて、可
視モードにした。普段は不可視になつていて、自分にしか見えない
仕様になつてている。

『え、すいこ！ 21-3 レベ！？』

『うわっ、めじかよ。・・・ってしかも、前回のOR2位じゃねえか』

『 WWWいやあーそれほどでも——』

『すいこすいー！ わたしよりランキング上の人とははじめてあつた！ ねえ、コウナ。フレンド登録してくれない？』

『いいよー』

フレンド登録。これがこのゲームの中で、最も重要なシステムだ。さつやも、フレンドを呼び出せるフレンドホールをしたが、フレンドを登録しておくと、様々なメリットがある。なるべく強い人とたぐさんフレンド登録する！ とで、ゲームの効率は格段と上がる。

『俺もフレンド登録してくれないか？』

『えー・・・。じめん。私は男の人とはフレンド登録しない！ 』

「・・・・・・・・」

断られた。普通のネットゲームなら、男女を偽ってプレイすることも可能だろうが、このBCOは少し事情が違う。BCOは、普通にネットで登録して、ネットからダウンロードするというゲームではない。きちんとゲームショップ等で、ソフトを買わなければいけない。その際、レジでID発行用のシリアルコード登録をする。そこで登録するためには、身分証明書が必要となり、もちろん、男女の

確認から、年齢まで比較的細かく登録される。

『じゃあ、話もこれぐらいにして、そろそろ狩りに行きますか』

フレンド登録できないまま、結局マナに話を打ち切られた。疾風はチラッと部屋にかけてある時計を見た。深夜一時を回っていた。今日も徹夜になりそうだ。

『よし、じゃあレッソニーーーー!』

ユウナがそういうと、3人はモンスターの巢食う、遺跡へと飛び込んでいった。

第一話？

閃光の「」とき、一太刀。目の前にいた、ワイバーンキングはどさりとその翼を落とした。今まで飛んでいたのだが、片翼を失ったため、バランスを崩し、地に落ちる。

『よし、いいよ！後は炎弾^{フレイズパー}に気をつけて』

ハヤテは自分自身に補助魔法をかける。一時的に物理攻撃力が上がる魔法だ。呪文詠唱が終わり、疾風は赤いオーラをまとう。

『ユウナ、補助よろしく！』

『了解！』

ハヤテは前へ、跳躍した。怒涛のスピードで、WK^{ワイバーンキング}に迫る。WKは気づいたように、首を上げ、大きな口を開き、連續して炎弾^{フレイズパー}を放つ。

疾風に当たるかあたらないギリギリのところで、ユウナ^{スピードスペル}が高速詠唱^{スピードスペル}で、呪文を唱える。高速詠唱^{スピードスペル}は、レベル200で、WIC^{ワイツチ}が覚えるパッシブスキル。通常の呪文の詠唱時間が約半分になる優れものだ。WKは何かに気づき、顔を上げた。上空に魔方陣が展開されている刹那、魔方陣からバケツをこぼしたように水が落ちてきた。

炎弾^{フレイズパー}は、水に打ち消され、跡形もなく消えてしまった。

ハヤテは水を受けつつ、さらに駆ける。

ヒュンと風を切る音。そのまま、長剣を振り下ろす。

ザン、とWKの弱点である頭に剣がヒットする。クリティカルヒット。

WKはそのまま、どさつと力をなくし倒れた。

『やつたあ！ 倒せたね』

『うん。ありがとな。一人とも』

WKは、黒い霧となり空氣に散る。それと同時に、ハヤテの頭の上にある、一本のゲージのうち、下のゲージが変化した。見る見るうちにゲージはたまり、再び0になり、またたまる。経験値ゲージは一気に増え、ハヤテのレベルは150となつた。

疾風はそれを見て驚く。

「すゞ・・・。こんなにたまるんだ・・・」

『これで、ハヤテも抽選漏れしないですむね』

『あ、ああ。ありがと。それにしても、何でこんなにたまるんだ？』

WKのレベルはハヤテよりだいぶ高い、176。普通に考えても、ここまで経験値は来ないはずなんだが・・・。

『それ？ それね、多分ユウナのおかげ』

『ユウナの？』

疾風は画面の前で首をかしげる。

『そだよー。経験値上昇のアイテムと、それと経験値上昇の魔法使つたの。それと、パッシブで「集約」もついてるから使つた～』

「集約」とは、パーティプレイのときに、全員に分配されるはずの経験値を、一人に集約して渡すことができるパッシブスキル。しかし、効果はスキルを習得してから、3回のみしか使えず、それ以上使うと自然消滅して、以後、使うことはもちろん、再習得もできない。もともと、習得自体困難なスキル。そんなものを使つたらしい。

『ユウナ、そんなものこいつのために使つたの？いいの？』

『かまわないよ。別に私使わないし。ああ、それと私そろそろ「落ち」るね。時間が時間だし』

疾風は言われて、画面右下に小さく表示されているクロックを見た。デジタル文字は、AM3:21を表示していた。こんなにやつていたとは気づかなかつた。

『やうだね。じゃあ今日はいいで解散かな。また明日も遊ぼうよ』

マナがそう提案すると、ユウナはいいよーと返した。ハヤテももちろん、と返事する。

『じゃあ明日夜9時ね。みんなお疲れー』
『お疲れ様~』
『おつ~』

疾風は、ヘッドホンを外し、ふうと息をはいた。ゲームを「閉じ」、パソコンの電源を切る。

明日（正確には今日だが）は七時から学校だ。冬休みなのとかそんなこと思つてゐるのだが、部活の練習なのでしかたがない。疾風は剣道部に所属している。べつにそう強くはないが、楽しい。

あと三時間ほど寝れる。疾風は無言でベッドに入ると、眠つてひたすら寝た。

第一話？

「よお、疾風」

「あ、おはよー」

後ろから声をかけてきたのは、疾風の親友である、白浜行人。百八十センチメートルはあるう長身で、体格もいい。しかし、顔はどちらかというと柔軟で、女子に人気がある……らしい。本人がそう言っていた。ちなみに彼も、剣道部でしかも、全国レベルというんだから、すごい。

「やつこやせ、疾風はたしかBCOやつてたよな

「うん、やつてるけど…………あれ？ 言つたつけ？ てか、何でお前がBCOのこと知つてるんだ？」

疾風は首をかしげた。行人は基本的にゲームをしない。嫌いってわけではないそうなのだが、どうも苦手ということらしい。

「いや、それがさ。昨日、家帰つたらさ、兄貴がなんかパソコンでゲームしてたわけ。それで、なにやつてるか訊いたらBCOだったんだよ。それでさ、お前もやってみないか？ ていわれて、少ししたわけ」

「それで？」

「面白かった

「はあ…………それでどうしたんだ？」

「ああ、今日買いに行こうと思つんだが、部活の後付き合ひよ」

「別にいいけど……」

ふと見ると、校門が見えた。部活動の生徒がちらほら登校してきている。疾風たちも、校門を抜け、剣道場へといく。

「それでさ、おまえやるんだろ？ 初期クラスなんにするの？」

「クラス？ クラスってなんだ？ 学校……？」

「バカ」

「バカって何だ、バカって」

まあ、たしかにゲームに疎い人間はいつもわからないだろう。

「クラスっていうのは、職業のこと。例えば、ソルジャー剣士ワイザードだつたり、魔法使いだつたり、そういうやつ」

行人はなるほど、と頷いた。

「どんなんがあるんだ？」

行人は胴着を準備しながら、訊く。

BCHOは本当にクラスが多く、正直全部説明するのはだい。まあ、代表的なクラスだけでいいだろ？ 疾風も、胴着を身につけながら、説明をはじめた。

「んじゃ、一部だけ説明するよ。まず剣士^{ソルジャー}。基本的な剣を使うことができる、攻撃力守備力ともに、バランスがよくて、そこそこ人気がある。

次に、ガンナー。その名のとおり、銃を扱えるクラスなんだけど、銃は難易度が高くて、挫折者が多い。でも、ガンナーはもともと俊敏度・・・・・足が速くて、そこは役に立つかな。

そして、魔女^{ウィッチ}、魔法使い^{ワーカー}。女だつたらウィッチ、男だつたらワーカー。魔法に特化したクラスで、これは一番目ぐらいに人気が高いかな。ああ、でもこれはレベルがだいぶ上がらないと取得できないから、最初から使える、ってわけじゃない」

ふんふんと、行人は真剣に聞いている。

「ほかには、俺も選んだ万能剣士^{ヴァーサテリーネ・ソルジャー}。剣も魔法も両方とも使える人気クラス。でも、こいつはよく言えば万能、悪く言えば器用貧乏だから、最初のほう早くたつけど、後からは微妙かな

」

「そりゃ

ちょうどそこで、講師の先生が入ってきた。一人は急いで、ほかの部員とともに整列をした。

練習が始まると、ボーッと、打ち込みをしながらBCOのVRAC版のことを考えていた。早く、部活終わらないかなと、そんなことばかり考えていた。

「今日の練習はこれで終わりだ。では、連絡事項を言つ。来週木曜日に、私立今泉川高校と練習試合を組んだ。詳しい時間は後日報告する。では、解散！」

「「「「ありがとうございました」」」

挨拶が終わると、部員はそれぞれ胴着を脱ぎ、下校していった。

「はあ・・・・。冬だつてのに。胴着暑いなやっぱ」

「だな。そういうや、お前昼飯どうする?」

「昼飯かあ・・・・・。どつか適当にファーストフードでいいんじゃない?」

疾風はそういうながら、スポーツバッグを肩にかけた。

「そつか。まあ、まだ昼までには時間あるから先にBCO買いに行きたいんだけど、いいか?」

「べつにいいけど」

二人は学校を出ると、学校から一番近くにあるゲームショッピングに向かつた。入り口すぐのところにBCOの特設コーナーが設置されていた。

「これかあ」

行人はBCOのソフトを手にとり去る。

「そういえばお前、今日身分証明書もつてるか？」

「なんで？」

「いや、BCO登録の時にいるから」

BCOの登録はめんどくさい。きちんと身分証明書を提示し、店で登録しなければいけない。

「まあ、生徒手帳なら」

「それでいいよ」

レジに向かう。レジには幸い客はいなかつた。

行人はBCOのパッケージをレジに出した。

「……では、『登録をしますので、身分証明書をお願いします』

行人は「モモ」と、バッグの中から生徒手帳を取り出し、店員に渡した。

店員はなにやら、レジ横のパソコンに入力していく。

「はい、登録完了しました。こちらはお返しします。それと、これを

店員は生徒手帳とともに、小さな紙片を渡した。

「これは？」

「はい、これは本登録用のIDとパスワードを書いた紙になります。ご自分のパソコンにBCIOをインストールされて、起動するときに入力を求められるので、なくさないようにお持ち帰りください」

ありがとうございました、という言葉を背に受けながら、一人は店をでた。

「んで、どうする？ 昼飯いく？」

疾風がいふと、行人は首を振った。

「いや、俺の家に来いよ。昼飯は食わしてあげるからだ。BCIOのこといろいろ手伝ってくれ」

それから、疾風は行人の家に行つた。

行人の家はマンションの一室で、そこそこ広めの部屋だ。どうやら、今日は誰もいないらしい。家中は静寂に包まれていた。

「そういえば、お前の家に行く初めののような気がする

行人とは、中学一年からの付き合いだが、休日遊ぶと言つたって、どこかに出かけてばかりで、お互い、相手の家に入ったことがなかつた。

「俺の部屋はこいつ

行人は自分の部屋へ案内した。

部屋に入ると、そこはなんともシンプルな部屋だった。
ほとんど何もない。

あるものといえば、ベッド、勉強机、教科書類・・・・・・その程度だ。マンガ本もなければ、趣味を匂わせるものすらない。高校生の部屋とはどうていえないほどだった。

「ほんと、何にもないな」

「だな」

行人は机の上においてあるパソコンを起動させた。最新型らしく、動作音が少しもない。そのせいで、さらに静寂は深まる気がした。行人は買ってきたBCOの箱を乱暴に開けると、中に入っていた説明書と、CD-ROMを取り出した。

「CD-ROMをパソコンに入れればいいんだよな

疾風は無言で頷く。

パソコンが完全に起動すると、行人はさっそく、BCOのCD-ROMをパソコンに挿入した。

すると、デスクトップ上に自動でランチャーがあらわれインストール画面になる。

「そこ、そのインストールって言うボタンを押して」

行人はなれない手つきでマウスを操作し、押す。

インストールは始まつたが、インストール残り時間の表示は二十分。結構かかる。

「Iの間に、昼飯食うか

「ん、そうするか」

昼食は結局、カップめんだつた。はじめ行人は、「俺が作つてやる」とかいつていたが、冷蔵庫を見るとほとんど何も入つておらず、入つているものといえば、納豆ぐらいだつた。さすがに、納豆だけで料理できるわけもなく、昼食は戸棚においてあつたカップめんになつた。

カップめんを食べ終わつた時、ちょうどインストールが完了していた。二十分もたつていなが、あれはあくまで予想時間なので、実際は早く終わつたりする。

行人はさつそく、デスクトップ上に新しくできたBICOのアイコンをダブルクリックした。画面が一時、暗転する。

数秒たつて、BGMがなり始めた。それとあわせるように、動画がだんだんフェードインしてくる。

「ああ、すげえ」

はじめてこのゲームをした人は、たいてい、まずこのオープニングで驚く。ほとんど、アニメに近い。

オープニングが終わり、画面はログイン画面へと映った。

「ほら、 そこのフォームにさっきも入ったIDとパスワードを入力して」

「おう」

行人のタイピングは早くはなかつたが、何とか打ち込む。

- 仮ユーザー認証しました -
- 続きまして、本登録に移ってください -

続いて、画面はユーザー登録画面へと切り替わる。

「そこに、自分のすきなIDを入力して」

「IDかあ。IDって名前だろ? どうしようかな」

行人は五分ほど考えたのち、こう入力した。

- 死を誘うもの -

「・・・・・・・・・・・・なにそれ」

「いや、なんかかっこいいだろ?」

確かにカッコイイかもしれないが・・・・・。とりあえずそれ以上はつこまない。

「まあいいや。次はクラス選べよ。ほら、その六個から選べる」

「なるほどなあ・・・・・。いろいろあるな・・・・・」

行人は一つ一つのクラスの説明を見ていく。

「ま、俺はこいつかな」

そつ言つて選んだのは盜賊シーフだつた。

「あ、シーフかあ。まあいいと思うよ。使える武器は少ないけど、アイテム集めに特化してるし、足も速いから。そこそこ使える」

「んで、次はつと・・・・。アバター選択・・・・・・・?」

行人はどうやらアバターという言葉を知らないらしい。

「アバターっていうのは、ゲームの中の自分の姿とでもいえばいいかな。そこで作ったあバターで、ゲーム内では動く」

「なるほどね」

力チカチとキーボードを打つ音が響く。アバターの製作には十分もかかったが、まあそこそこましなアバターが完成した。現実の行人と同じ背の高いアバター。しかし、体格はどうちかというとすらつとしていて、ひょろ長い体型になっていた。

アバターも完成したところで、ログインボタンを押す。
ログインするとすぐに、下にインフォメーションが出てきた。

- 初心者モードにしますか？ -

「あ、それN〇でいいよ。俺が説明する」

行人は傾きN〇のボタンを押す。

「そ、それじゃまず訓練場で練習してみるよ。訓練場は、街に出て右側にある」

行人のアバター 「死を誘うもの」は自室から街へ出て、訓練場へとむかった。

「シーフは基本短剣をつかうから。短剣はリーチが短いから気をつけて。まずは、訓練場入り口で初心者ミッショーン？を受けろよ。クリアすれば、そこそこお金が手に入る。あ、ちなみにゲーム内通貨はY\$だから。まあユグドラシルなんてまだ実装されてないのに、なんでそんな名前なのが不明だけど」

「死を誘うもの」は、初心者ミッショーンを受け、訓練場へと入った。すると、目の前に二体のゴブリンが現れた。

「ほら、シーフは多数を相手するの苦手だから一体ずつ「釣つ」て・
・・・・・つて、あ」

言つた時にはすでに、「ゴブリン」に一體とも気付かれてしまつていた。「死を誘うもの」は銅の短剣を振るうが、当たらない。まだ、はじめたばかりのため、距離感覚がつかめていないのだ。そのまま、運が悪いことに、ただのゴブリンにふるまつこにされ、「死を誘うもの」は倒れた。

「おー、しんだぞ。どうすりゃいいんだ

疾風は頭をかかえた。初心者ミッション？で死ぬプレーヤーをはじめてみた気がする。

「ちょっと、なんか頭痛くなってきたから帰るわ」

疾風はそういうと、行人が後ろで何か言つてゐるのを無視して、部屋をでた。

「はあ、あれじゃだめだな。ま、一人で頑張れよ、つと」

それから、疾風は家まで一直線に帰つた。

家に帰るとすぐにBCOを起動させ、レベル上げに向かつた。

夜はまたコウナとマナといっしょにレベル上げをした。

その結果、ハヤテのレベルは200まで上がった。

次の日だった、ハヤテにゲーム内システムメッセージが届いたのは。
-あなたは、BCO、VRAC版ベータテストプレーヤーに選ばれました。つきましては、こちらのアドレスすから、お申し込みください -

疾風は、その日嬉しさのあまり部屋の中で暴走し、顔面から盛大にこけ、鼻血が出たのはまた、別の話。

設定資料?? モンスター・武器設定

（モンスター図鑑）

No.00A ゴールドゴブリン 種族／獣人／ - 属性／ - 弱点属性／ - 弱点部位／ -

パッシブ／逃走不可／自動防衛？／ランダムAI？

ドロップアイテム／ゴールドなど

No.167 アンデットドラゴン 種族／アンデット／竜 属性／闇 弱点属性／光 弱点部位／頭

パッシブ／自動回復？

ドロップアイテム／ -

No.198 ワイバーンキング 種族／竜／ - 属性／火

弱点属性／ - 弱点部位／翼

パッシブ／ -

ドロップアイテム／ -

（武器図鑑）

カーテナソード ランクSS 属性／相手の弱点に合わせて変化

固有スキル／カーテナラッシュ

カッパーダガー ランクG 属性／ - 固有スキル／ -

（魔法図鑑）

パワーインチャント ランクB 一定時間対象一人の物理攻撃力を

20%アップさせる。

レインコール

ランクB

指定した場所の上空から集中的に

激しい雨を降らす。火属性の攻撃に当てる時、一定確立で打ち消すことができる。確立は術者の水補正に比例する。

第一話「BCO・VRM MOAC」

疾風は朝早くから、じそじそと出かける準備をしていた。今日は、待ちに待つた、BCOのVRM版のベータテストの日だ。

ベータテストは、東京にある、BCOを運営している会社の本社で行われる。ベータテストは、パソコン版のBCOのプレーヤーの中から、百人が抽選で選ばれ、その内審査に受かった人だけができることができる。ベータテストは三日間にわたってとりおこなわれ、その間の宿泊施設は会社側が全額負担するという、出欠サービスぶりだ。

BCOのVRM版の開発には一億円以上もかかったそうなのだが、そんなにサービスをしても大丈夫なのだろうか、と疾風は本気で心配する。

しかし、そんなことができるのはBCOの人気が故だ。

「こんなもんでいいかな……」

疾風は準備を終えると、昨日の夜に買った清涼飲料水を口に含んだ。自分の部屋にある小さな冷蔵庫に入っていたので、冷たい。爽やかな味が、のどを潤す。

今日から二日間のベータテスト。もちろん、親にはゲームのために三日も遠出する、なんてことは言えるはずもなく、行人の家に泊まる、とだけ言つておいた。行人本人には、昨日そのことを伝えた。口裏は合わせてくれるそうだ。しかも、行人の母親も協力してくれること。疾風本人は気づいていなかつたが、どうも行人の母親

の中での疾風の評価は高いらしい。特に評価されるようなことをしたこともないので、そういうわれたとき、つい首を傾げてしまった。まあ、親子そろって協力してくれるなら、今回のこととは家族にばれないだろ？。

疾風は軽く朝食を済ませると、用意していたバッグを持って家を出た。疾風は東京に住んでいるのだが、どっちかと云つと田舎のほうだ。BCOの本社がある、東京中心部までは、電車で少し時間がかかる。

最寄の駅は疾風の家から歩いて五分。自転車に乗るまでもないので、歩いて駅へと向かう。

冬休みとはいえ、朝なので通学や通勤のラッシュと鉢合わせになつた、そのため、電車内は人が多く、ごったがえしていた。

振動、駆動音ともに少ないこの最新型の車両は、ドーナツ化減少が進む今、郊外と、中心部とをつなぐ、大切な役割を担つている。

電車に乗っている間、疾風はBCO、VRAC版のことばかりを考えていた。

実を言うと、BCOの抽選に当たつたあと、百問ものアンケートをさせられた。質問のうち、三分の一はBCOに関する質問。そして、残りは個人的なことを聞いてくる質問だった。

たとえば、身長や体重、既往症や精神的疾患の有無などだ。

そんなことを聞いてくるのは、VR機器に少なからず人間への悪影響があるからだ。それは特に、精神面が弱っていると影響を受けや

すこらし。そのため、事故を防ぐといつとも念ね、IJのようこそおざまな質問があつたのだ。

約三十分ほどで、目的の駅に着いた。

東京の中心部に位置するこの街。朝早くにもかかわらず、人は多く車の音が五月蠅かつた。

疾風は、ポケットからメモ帳を取り出した。

そこには、BCOの本社ビルの住所がメモされている。

とはいえ・・・・・

「住所だけあつても、わかんねよなあ・・・」

いろいろ悩んだ挙句、ちょうど視界の範囲にあつた交番に行くことにした。

交番にいた駐在さんは優しそうな若い男の人だつた。

「へえ。IJにいくんだ。もしかして、BCOのベータテスト?」

駐在の口からは意外な言葉が出てきた。

「あ、えーっと。はい。なんで、しつてるんですか?」

「いやいや。俺もBCOをやつてるからね。別に駐在がゲームした

らいけないって法律はないでだろ?」

またしかにそうだ。

「ベータテスト行ったかつたんだけどね。抽選落ちだよ。ちなみにこのビルは、そこの大通りをまっすぐ進んで、四つめの交差点を右に曲がって。そしたら、すぐわかるおもつかうから。わからなくなったらまたあいでよ」

「はい、ありがとうございます」

「ま、ベータテスト、俺の分も楽しんでこいよ」

疾風は軽くお辞儀をすると、交番を出た。

「三つ目の交差点をまがって、と」

曲がると、すぐ大きな建物が目に飛び込んできた。

疾風はそのビルの入り口に書かれている会社名を見る。

スノートライアングル株式会社。

BICOを運営している会社

。

第一話？（前書き）

今回急いで更新したのでぐらぐらしています。後日ゆっくり修正します。

第一話？

入ると、そこはなかなか広いロビーだった。いたるところに、BCOのポスターなどが張つてあった。ふと、受付の横に、紙が貼つてあるのが目に入った。

『^{ベート}テスト会場はこちら』

疾風はその紙の指示に従い、進むことにした。入り組んだ社内。張り紙がなかつたら、迷つてしまいそうだ。

「ここ……か……」

たどりついたのは七階。

エレベーターの真正面にある、カウンターらしきところには『テスト受け付け』と書かれた張り紙がある。しかし、受付といつても、人は誰もいなかつた。かわりにそこにあつたのは数台のパソコン。近寄つてみると、パソコンのデスクトップには、『テスト受け付け。』と表示されて、一つのアプリケーションが起動していた。

疾風はきょろきょろと辺りを見回す。誰かいないかと。しかし、人影は見当たらなかつた。

そういえば、一昨日、マナやユウナと遊んだ時に、一人ともが抽選に当たつたことを聞いた。今、ここには誰もいないが、またあとで会えるだろう。

そのアプリケーションには一つのフォームがあった。一つはBCOのIDを入力する欄。もう一つはBCOのパスワードを入れる欄。疾風は、パソコンの前に置かれているイスに座ると、それらを素早く入力した。

- HAYATE - 02214
- * * * * * -

確定ボタンを押すと画面が変わった。

『ようこそ。BCOVRAC版 テストへ。これから、個人ルームへ案内いたします。係りの者が参りますのでそのままお待ちください。ID:012』

五分ほどそのまま待つていると、スーツを着た若い男の人があつてきた。首からは、BCO テストガイドとかかれたネームプレートを下げていた。

「こんにちは。ようこそ、スノートライアングルへ。僕は、BCO ベータテストガイドをしている、さがき 榊。よろしく」

榊は、そう言って、パソコンのほうを見た。

「えーっと、ID012か・・・・」

榊は、脇にはさんで持っていたバインダーにはさんでいる紙を見る。どうやら、今日の参加者の名前が書かれているようだ。

「駿河疾風、くんでいいのかな?」

「はい」

「そうか。よろしくな。それじゃあ、今からいろいろ案内するから。まず、テストを受けてもらう前に、宿泊場所と、テスト場所、そのほかいろいろ場所覚えてもらつから」

「はあ・・・・・・・。えーと、テストはいつ始まるんですか?」

「ああ、テストは十時からだ。早くしたい気持ちもわかるけど、こっちも大切だから。それじゃあ、ついてきて」

そういうと、榊は施設の案内をはじめた。まず始めに行つたのは、ベータテスト会場。驚いたことに、会場は個室だった。榊が言つには、

「まあプライバシーの保護とかのためかな。ほら、オンラインゲームつて正直なところを言つと、素性知れりやうと、いろいろ困るでしょう?」

まあ一理ある。オンラインゲームにおいて、一緒に遊ぶプレーヤーのことなんて何もわからない。べつに知らないでもいい。いや、むしろ知らないほうがいいだろう。

もちろん、あるプレーヤーと仲良くなり、それから聞くのならいいが、あくまで他プレーヤーは赤の他人だ。そんな人に個人情報を教えるとなると、やはり心配になる。

個室の真ん中には人が一人入る大きさのカプセル状の機械があいて

あつた。それの中を見せてもらつたが、中身はいかにも座り「こちの良さ」そうな、背もたれの大きい一人用のソファーみたいなものだつた。ここに座つて、VRと接続するらしい。

次に行つたのは宿泊施設。少し離れた場所にあつたそれは、なかなか大きなホテルだつた。しかし、どうも気に入らない点が一つある。その場所はいわゆるアキバ。秋葉原だつた。交通の便はいいのだが・・・・・、疾風はどうも、秋葉原に偏見を持つていた。

べつに、嫌いってわけではない。べつに、そこがクラスで『おたく』が行くところとかいわれてるのも関係ない。むしろ、疾風自身、最近ゲームおたくになりかけてるなあ、とか実感してるのでから。

しかし、どうも近寄りがたい何かがあつた。まあ、今回の二日での認識は変わるかもしれないが・・・・・。

さいわい、ホテル自体は普通だつたので（当たり前だが）問題はなかつた。なぜか、東京の秋葉原にあるのに、温泉がどうとか書いてあつた。謎だ。

三番目に連れて行かれたのは、なんと、病院だつた。

しかも、はじめの内科は普通として、一番目に行つたのが精神科。抽選に当たつたさい、アンケートをしたとはいえ、やはり会社側は、慎重に行きたいらしい。

まあそれもそうだろう。ベータテストの段階で事故でも起こしたら大変だ。

約一時間かかつて各場所の確認が終わり、再びスノートライアングル本社に戻ってきた。

榎は疾風にテスト室に行つておいて、と言い残し、準備をするためかどこかへ行つた。

疾風は部屋の隅にあつたソファーに座つた。ふと、横に目をやるとBCOVRAC版の説明書があつた。

分厚い説明書の表紙には、マジックで軽く目を通しておいて下さい、と書かれていた。疾風は、説明書を開く。

BCO事態の説明は見るまでもなかつたので飛ばした。そのほかには、新しく追加された機能や、VR状態での操作の仕方が書いてあつた。

VR。五年前に実用化された最新技術。この五年間の間、実用段階まで行つていたVR技術は、その実用の費用の高さゆえ、ほとんど製品化されなかつた。一時期、アミコーズメントパークで実用化が試みられたが、費用を計算したところ半端ない額になつたので中止になつた。海外ならすでにVR機器を製品化しているのだが、不況の日本にはそんな余裕がなかつた。しかし、一年前スノートライアングル社が、VR技術を応用したゲームを作成していることを発表した。じつは、七年前からすでにその計画が秘密裏に進められていたという。そして、今回のベータテスト。

科学の発展はすさまじい。

疾風は説明書に一通り目を通すとポツリと呟いた。

「こよいよだな」

そう、いよいよだ。やっと、待ちに待った、憧れに憧れたVRMM OAC（仮想現実多人数参加型オンラインアーケード）が体験できる。

バタン、ヒドアが開き、神が入ってきた。

「やあ、待たせたな。説明書には田を通してくれたかな？」

「はい」

「やうか、なら今からベータテストをはじめるといふ」

「はい！」

疾風は輝くような表情で、ソファーから立ち上がった。

「じゃあ、そのカプセルの中へ入ってくれ」

神が、カプセル横の小さなボタンを押すと、カプセルのふたが開いた。疾風はそこに入り、中のソファーに腰掛ける。

「じゃあ、その手を置くところがあるだらうそこに手を置いてくれ。そしたらあとは音声ガイドに従ってくれ」

「はいわかりました」

左右にある肘掛け（？）に手を置く。すると、カプセルのふたが勝手に閉まり、手首辺りはゴム上のバンドで拘束された。

『BCOVRAC版ベータテストへようこそ。まずは、ヘッドギアを装着します。頭を動かさず、リラックスしてください』

「イーン」という音とともに、頭に何かがかぶさつた。これがヘッドギアだろ？。ヘッドギアとは、VRに接続するための必需品で、これから様々な電気信号が脳へおこられ、逆に、脳神経からのからだへの接続を自動的に最小限へ設定。かわりにヘッドギアのほうへ接続される。

頭がぼんやりしてきた。

『それでは、接続をします。接続コネクトという単語を、思い浮かべてください』

(・・・・・接続)

刹那、ギュンと意識が暗闇に放り出される感覚に襲われた。接続が始まっている時の感覚なのらしい。説明書に書いてあった。

数秒後、疾風は暗闇の中へ一人佇んでいた。

「これがVRなのか・・・」

いや、たたずんでいるでいるという表現はおかしいだろう。なぜなら、視界はあるが自分の体が見えなかつたからだ。すこし戸惑つていると、空中に文字が現れた。それと同時に女性の声が聞こえてきた。しかし、それは合成音声だ。

『コネクト成功しました。これから、初期設定へと移ります。

まずはログインをします。』

目の前に、透明なウィンドウが現れた。

ID : H A Y A T E - 0 2 1 4

コーナー名 : ハヤテ

クラス : V S L

『以下の情報に間違いがなければ、YESを押してください。』

情報にはまちがいはないのだが、自分の体もないのにどうやって押せというのだろう。

悩んだあげく、もし自分の体があつたらと、想像してからだを動かしてみることにした。

動く。

からだは見えないが確かに感覚はある。

ハヤテはそのままYESに触れた。

『認証成功しました。

続きましてアバター設定に移ります。』

どうやらBCOパソコン版の時のアバターは適用されないらしい。しかし、パソコン版のさいに適当にアバターを作り、後から帰られないことを知つて嘆いていた疾風にとつてはそれは願つてもないことだった。

『今回はベータテストとなっていますので、アバターはランダム選択となります。ほかのプレイヤーと被ることはないので心配はあり

ません』

ふと、変化がおきた。

自分の手が、足が体が見えた。シンプルな軽装備を着ている。その装備はBCOの初期装備であるビギナーシリーズと同じものだった。

『これがあなたのアバターです』

そう言つと、目の前に鏡が現れた。疾風は鏡越しに自分の顔を見る。

「ええええええ！？」「これが俺！？」

そこに移っていた顔はどうも女の顔に見えた。いや、どちらかというと中性的な顔というべきだらうか。

すらりとした顔に、大きな瞳。髪はショートヘアだが、女の子にもむちむちんショートヘアはいるので結局どっちとも取れる。

もともと、現実のハヤテの顔も中性的な顔だった。なんていうのだろうか。女子からはよく、「疾風くんて、かわいい系だよねー」といわれていた。余計なお世話なのだが。

しかし、今の顔は現実の時を優にこえる。

まあ、

「ブサイクよりはいいか・・・・・。って、ん~？」

ハヤテは改めて自分の顔をじっと見た。

そういうえば、パソコン版のBCOの時に使っていたアバターと似ている気がする気のせいだろうか。いや、気のせいではない。

『ついでに、このアバターはパソコン版のデータをもとに作られているのだろうか。

『やはりお時間ですので、自室へ転送いたします。』

「え、あ、ちよつ

と、待つて、とつ瞬もなく、まわりの視界が暗転した。

第一話？

いきなりの転送^{トランポーティング}でたどり着いた場所はちょっと古めの個室だった。ベッドがあり、壁に寄せておいてある本棚には、様々な本が置かれている。そして、大きな箱がある。それはゲーム内で言う、「倉庫」だろ？。

こじはあきらかに、パソコン版のBOOの血姫と同じものだった。
VRに忠実に再現されている。

「これがマイルームってわけか…………！」

ハヤテは自分の発生した声に驚く。こつもの疾風が出している声とちがつたからだ。いつもより声のトーンが高い。ちょうど、声変わりする前の男の子の声、と言つたところだらうか。よつくるこじは、高い。

これも、プライバシーの保護のためだろ？

「でもこれじゃあ、本当に女の子みたいだな…………」

ハヤテは少し違和感を感じながらも、これがVRの世界なんだなと実感する。

「あ、そうだ。メニュー。メニューウィンドウってどうやって出すんだっけ…………？」

メニュー・ウインドウはゲームにおいて重要な。例えば、武器、防具などを装備する、装備編集ウインドウも、所持アイテムを整理する、

持ち物ウインドウも全てメニュー・ウインドウを介しなければいけない。

ハヤテは何とかさつき見た説明書に書いてあった方法を思い出そうと試みる。

「たしか……、」「つか?」

ハヤテは右手を勢いよく、斜め下に振り下ろす。すると、下の何もないところに手ごたえを感じた。ちょうど、さつき立体メニューを開いた時と同一の感触。

ハヤテの眼前に、半透明のホログラムのウインドウが現れる。疾風はそれに触れ、メニューを操作する。まず、能力ウインドウを開いた。

name : HAYATE
class : VST
lv : 0
exp : 000 / 100
物理攻撃力
物理防御力
物理改心率
魔法攻撃力
魔法防御力
魔法改心率
メンバ数
メンバ数

完全に初期の数値だ。このゲームはレベル0からスタートする。パソコン版では現時点で最高レベルは三百だったが、さつき説明書を

見たところ、このベータテストでは「百が最高」らしい。しかし、一日の内、少ないテスト時間で、一百はあるか、百まで上げることすら無理だろう。

ハヤテは一旦ステータスウインドウを消し、次に装備ウインドウを開いた。

武器：カツパーソード
指輪：ビギナーリング

頭：

体：ビギナーベスト

手：

足：ビギナーブーツ

アクセサリ：

その他：

「ん・・・・・？」

一つ、気になる点があった。それは、装備ウインドウの一一番下、その他という欄だ。パソコン版のときはそんな、曖昧な名前の欄はなかった。ようするに、アーケード版で実装されるシステムढうどう。なにが装備できるのかが楽しみだ。

ハヤテは全てのウインドウを消した。

何をしようかと、ベッドに腰掛けた時、目の前に一人の少女が現れた。ハヤテは驚き、身をひく。しかし、次の瞬間には驚きよりも、興味のほうが強くなっていた。

とても長い髪で、頭のちょうど天辺には大きなリボンをつけていた。

かわいらしい顔つきで田を奪われる。

まあ、それにしてもいきなりだ。いきなり少女はあらわれた。どこから入ってきたのだろう・・・・・・と現実なことを考えている自分に気付き、苦笑する。そうだ、ここはゲームの世界だ。たいでいのことは、それが非現実な事だとして起きる。だって、この世界自体が非現実なのだから。

ハヤテは冷静になり、少女に話し掛けた。

「君は誰？」

少女は、淡々とした口調で、

「はい、私はこのBICOのガイド及び制御を行つております、A.I.^{アーティ}（人工知能）です。名前はそのまま、A.I.をローマ字読みして、「アイ」でいいです。普段は、実体はありませんが、今回はNPCとして、存在させて頂いてます」

「はあ・・・・・・・・」

ハヤテは、アイの言葉にただ驚く。

彼女はNPCらしい。

見た目ではまったく分からなかつた。ただの人間と変わらない。これがNPCとは思えなかつた。

「君は本当にNPC？」

「はい、そうです」

しかも、普通のNPCとちがい、会話が成立している。ゲームのNPCというのは基本一方的に、パターンで話しているだけだ。しかし、アイはちがう。ちゃんと、話し相手の言葉を理解し、受け答えをしている。AIも進化しているということだろうか。

「ところで、何で君はここにきたんだ？」

「簡単なことです。私はガイドですから。あなたを連れ出しにと言つたら表現的におかしいですが、呼びにきました」

「なんのために・・・・・?」

「いまから、メインイベントの始まります。場所は中央都市アーネンエルベのSSS地区、中央広場です。内容としては主に、ゲームの説明、ベータテストの概要等です。全員強制参加ですので・・・。もし、『自分でいかれない場合は強制転送となります。強制転送はペナルティが課せられるので・・・。ハヤテ様も、お早いうちに向かわれたほうがいいかと思います』

こんな子がけいを使つて話していると、違和感を感じる。それはともかく、いまハヤテのいる部屋はアイいわく、アーネンエルベの宿屋の一室だという。ちなみに、アーネンエルベという町の名前には聞き覚えがなかった。パソコン版のとき、最初の町の名前は違つた。よつするに、今回の拠点がここ、というだけの話だが。

「やうだな・・・・・。んじゃ広場に早いとこ行こうかな

ハヤテは再びメニュー画面を出す。今度はマップウィンドウ。ホログラムで忠実に再現されるアーネンエルベ。画面上に表示される赤い点が自分。場所は、

『アーネンエルベA - 11112』

宿屋とはいえど、ビルのような形だった。おそらくA - 1が番地で、112が部屋番号だらう。

「ねえ、アイ・・・・・・ってあれ？」

マップを消し、前を見ると、アイは既にいなくなっていた。役割を果たしたからいなくなつたのだろうか。

ハヤテはそう決め付け、部屋からでた。

やはり、ビルのようなつくりの宿屋だった。どっちかといふと、ホテルという表現のほうが近いかも知れない。

ハヤテの部屋は一階で、部屋を出てすぐのところになぜか自動販売機があった。ファンタジーの欠片もない機械。逆に、それが新鮮なものに見えるほど意外だった。VRの中で飲み食い・・・・・？ そんな矛盾に疑問をもつ。

そういえば、何かで見たが、VRのなかで飲み食いをすると、味も感じるし、満腹感も得られるという。しかし、それはあくまでヘッドギアから電気信号として伝えられたもので、現実ではない。そのせいで長時間VR内で『生活』していると、餓死の危険もあることが示唆されていたような気がする。

まあ、あとで買つてみよう。そんなことを思いながら、ハヤテは外へでた。

第一話？

そこは、なかなか綺麗な町だった。その町並みは何処か、ヨーロッパを思わせる。

ハヤテは、そんな町の細い道を走る。いまいるA 1地区から、S S地区へは、走って五分といったところ。べつに、走らなくても十分間に合いそうなのだが、ハヤテはあえて走った。

それは、早く行って人探しをするためだ。

探すのはもちろん、マナとユウナ。

おそらく、二人のアバターも自分と同じようにパソコン版のときと、似たものであるにちがいない。

ふと、目の前の視界が開ける。そこの広さの広場。中央には噴水があり、円状のその広場の円周上には、ベンチがいくつかあった。ここがSS地区『アーネンエルベ中央広場』だ。そこにはすでに、数人のプレーヤーがいた。それぞれ、ベンチに座ったり、数人が集まって話したりしていた。

ハヤテも広場に入り、二人を探す。

広場の端のほうに、少し背の低い空色の髪の少女がいた。一人ゆつくりと、ベンチに座っている。

「ユウナ・・・・？」

ハヤテは近寄り、話し掛けた。

コウナは顔をあげ、ハヤテのほうを向く。

「…………誰？」

「…………」

第一声はそれだった。どうやらハヤテのことがわからないらしい。まあ、無理もないだろ？ どう見ても、どう声を聞いても、女性プレーヤーに見えてしもう、ハヤテのアバターでは。

「俺だよ。ハヤテ。わからない？」

ハヤテは自分のプロフィール画面を表示させる。コウナはそれをじつと見て、えつ、と驚きの声を上げた。

「ハヤテ…………？ なんで、ハヤテって男なんじゃ…………」

「

と、コウナはハヤテのプロフィール画面に書かれている『性別・男』という表示を見つける。

「女の子にしか見えないんだけど…………」

「だよね。やっぱそうだよね。俺も自分で思った。でも、アバターはほぼランダムだし。仕方ない！」

「まあ、そうだね。運いいのか悪いのかわかんないねー」

「運なんか、悪いに決まってる。」

「ところで、マナ見かけなかつた？」

「あ、ああ。俺も今探してんだけど…………」

きょりきょりと辺りを見渡す。パソコン版でのマナのアバターは、黒の長い髪。そこそこの長身ですらりとした体型だった。

「まだ、きてないのか？…………」

「ダーンー！」

「うわっ！？」

いきなり、ハヤテは背中を手で押され、バランスを崩した。そのままで、顔面からレンガ張りの床に直撃。後ろでは笑い声が聞こえる。

「アハハハ。今で転んじゃう？普通。じねばないっしょ」

特に痛くもなかつたが、ハヤテは自分の頬を手でさすりながら、起き上がつた。そして、笑い声のするほつを振り向く。

そこにいたのは黒い長髪の、すらりとした少女。おそらく、マナだろ？ マナはおなかを抱えて笑っていたが、その笑いはいつのまにかユウナにまで感染していた。

「アハハ。フフフ。ハア。フウ。…………よし、なあつた。
こんちや、ハヤテ、ユウナ」

「あー。やっぱリマナかあ。いきなり、ハヤテを吹き飛ばすから誰かと思つたよお（笑）

「てか、マナ。こきなりそんなんことしなくてもいいじゃん……。
・。いてえんだけど」

本当は痛くなかったが、ちょっとつとも混ぜてそうこうした。しかし、
マナは、

「うそ。そんなに痛くなかったでしょ？だって、このVR、痛覚接
続だいぶ下げるから」

「うぐぐ、」

マナはちやんと知っていたようだ。

VR機器からの感覚信号は現実のものとほとんど同じだ。痛覚だっ
て例外ではない。ファンタジーの世界において、痛覚が通常と同じ
だけ伝わったら本当に死んでしまう。例えば、普通に剣を振り回し
て闘うし、モンスターは魔法を使ったりする。剣で刺されたとき、
本当にさされたときと同じ感覚が伝われば、ショックで気絶してし
まうかもしれない。

そんなことを防止するために、BICOでは、痛覚接続を約五パーセ
ントにまで、下げる。これは、説明書にも書いてあつたことだ。
マナもしつかり説明書を読んでいたらしい。

「こことは、おまえそれ知つててわざとやつたのか？」

「んーそつかもしれないし、そつじやないかもしない

マナはまぐりかすように笑いながら言った。

「あのなあ、おまえ・・・・・・・・」

ハヤテが言いかけたところでしか以上にシステムアラートの表示が出てきた。マナにも、コウナにも同様に出てている。

それは、メインクエスト発生という表示だった。

『こんにちは。みなさん。ようこそVR Bondage Connect Online VR^{ヴァーラック} A.I.版へ。』

どこからともなく聞こえてきたのは、さつきも聞いたA.I.の声だつた。

『私は、このゲーム内のガイド及びメインシステムを制御しているA.I.です。そのまま、アイと呼んでください。さて、メインクエストを開始します。皆さん、上空に注意してください』

見ると、いつのまにか広場にはたくさんのプレーヤーが集まっていた。全員がA.I.の指示どおり上を向く。

「なに?あれ

「飛行船……?」

空には、大きな大きな飛行船が飛んでいた。飛行船には大きなディスプレイがついていた。そこにはA.I.の姿が映っている。

『メインクエストの説明をいたします。主に、ゲームの説明となっています。最後まで聞けば、1000Y\$^{コグドラシルドル}と、ポーション?を一つ差し上げます。』

「1000か。まあ初期ならそこだね」

「そだねー」

「まあ、最後まで聞いづ

『では、説明をはじめます。ご存知の通り、本ゲームはVRを利用した世界初のゲームとなつております。このベータテストは、皆様にゲームを体験していただき、バグの発見および、意見を聞くためにとり行っています。

簡単にゲームのシステム、ルールの説明をします。操作の方法は省きます。もし、操作の方法等わからないことがあれば、メインメニューより「ヘルプ」を参照ください。

ベータテストでは全ストーリーの内十パーセントのみ体験することができます。最高レベルは一百です。システムは基本的にはパソコン版と同じです。剣、魔法を使い、仲間とともにマップ攻略をしてください。

今回新導入のシステムが三つあります

「新システムだって。なんだろ・・・・・・」

多分、ここにいる全員がそれを楽しみにしていただるつ。ここにいるプレーヤーは中級者以上なので、ゲームシステムの説明は要らない。むしろ、その新しい要素が楽しみだ。

『まず一つ目は、信頼度です。信頼度は数値で表され、下は -50、上は +50 の百段階となつています。初期は 0 となつています。現在の信頼度は、ステータス画面で確認できます。

信頼度のくわしい内容については言つことができません。そのまゝ、言葉の意味から想像して頂いて結構です。数値はシステムのほうが自動的に判断し決定されます。

勘違いしないで頂きたいのは、+だからいいとか、-だから悪いとかといつものはない、といふことです。どちらにも数値が高くなるほじいことがあるのです』

信頼度・・・・・。そのままの意味でいいのだろうか。例えばパーゲィー内で仲間の信頼を得る行動をしたりしたら、あがるとか、そういうものだろう。

『続いて二つ目は、装備欄のその他です。そこに装備できるものは様々ですが詳しいことは、皆様で探してください。

最後に三つ目は、カジノです』

「カジノ・・・・・・?

「カジノってあれだよね、ルーレットとかスロットとかそういうのにお金賭けてやるやつだよね?」

ユウナがハヤテに対して聞いてきた。ハヤテも詳しくカジノのことは知らないので、曖昧に頷いた。

『カジノはアーネンエルベの地区となります。では、いじょうで説明を終了します・・・・・・。あ、すみません、一つ忘れてました』

その言葉に、ハヤテは小さく笑う。

A.I.が忘れてましたなんていうとは、おかしいな、と。結局はシステム上の言葉を再生してるだけなのに。まあ、その忘れてました、も含んで一つのセリフなんだろうが。

『それは、このゲームの体感時間のことです。現実での一分間は、

ゲーム内では一十分となります。それでは、メインクエスト〇〇を終了します。報酬をお受け取りください』

A.I.がそういうと、報酬画面がぱっとあらわれる。プレーヤー達は、報酬画面にあるポーションを自分の持ち物ワインドウへと移す。

「聞くのも結構疲れるね。それにしても、すごいね一分が一十分になるなんて」

「だね~。まあ、たしかにこれならアーケードゲームでもそこそこできるってわけか」

「うんそうだな。アーケードなんて、長くても三十分ぐらいしかできないもんな。三十分でつたら六百分分。六百分といえば、十時間か。なかなかだね」

「うんうん。時差ぼけみたいのもあるかもね」

マナは苦笑いをした。

「ところで、マナ、ハヤテ。このあとどうする?」

「このあとか・・・。とつあえず、ミッションハントに行こうよ」

「やうだな。ミッションは確か、宿屋でも受けられたはず・・・。
ん。そういや、一人は宿屋どこ?」

聞かれ、二人は

「「A - 1だよ」

「「えつ！？」

と、み「」と云はもつた。

「コウナもA - 1だつたの？」

「マナもA - 1？」

一人は驚き、顔を見合わせる。

(ていうか、A - 1つて・・・・・・)

「ねえ、俺もA - 1なんだけど

「え、ハヤテも！？」

「なーんだ、みんな一緒ジャン」

「コウナもハヤテも一緒だなんて驚いたよ。じゃあ、みんなで一緒に宿屋に戻ろう」

「そうだね。あ、やうだ。あれ、使おう」と

そういう、コウナは呪文らしきものを詠唱した。すると、体が急に軽くなつた。

「これは？」

「あ、これ？新実装なんだけど、WICH^{ウイッシュ}の初期スペル。スピードランニング。そのままの意味。足が速くなる。これで、戻るの早くなるでしょ？」

「そうだけど……。あれ?なんで、レベル〇なのに、^{ウイ}W.I.C.^{ツチ}?」

たしかに。^{ウイツチ}W.I.C.は百レベ以降で受けれる特殊なミッションを受けないと転職できなかつたはず。

「えつとね。これパソコン版がそのまま引きつがれてるみたい。二人も、職選びできなかつたでしょ?職はそのままで、レベルだけになつてるみたい」

「なるほどね」

「じゃあ、いくよ?」

そう言つと、ユウナは走り出した。スピードランニングのおかげか、すさまじい早さだ。

「あ、ちょっとまってよ」

マナヒ、ハヤテも走る。

風を切り、人間として、ありえない速度で、道を駆け抜ける。

行きは五分かかった道を今度は三分で戻ってきた。

「はえー。すげ。これがVRかあ……。」

「ほり、勝手に感心してなこでミッション受けよつよ」

「あ、いや。その前にフレンド登録しなきゃパーティー組めないだろ。どうせ、Fパーティーを組むんだろ？経験値てきこも」

Fパーティーとこりのことはフレンドパーティーの略だ。フレンド同士で組んだパーティーのことをさす。普通のパーティーとはちがい、様々なボーナスがつく。報酬が増えたり、経験値が増えたり、攻撃力も五パーセント増加する。

「そうだね。んじゃ、フレンド申請送るよ」

一番早く反応したのはコウナだった。コウナはさっそく、フレンド申請の準備をしていく。

「あれ、コウナ、男には送らないんじゃなかつたつけ？」

たしかに前もハヤテがフレンドになろうとしたときに、そんな理由で断られた。

「あー、でも、女の子っぽいからオーケー」

「……」

そんな理由。ハヤテとしては、不愉快だったが、まあフレンドになってくれるならありがたい。

三人はそれぞれフレンド申請を済ますと、宿屋の受付で、一番初めのチユートリアルミッショングを受けた。いくら、中級プレーヤーと上級プレーヤーのパーティーとはいえ、VRでの戦闘は初めて。感覚を掴むためには、やはりチユートリアルミッショングだろう。

「 もう、 ここ？」

「 ああ、 」

「 うん！」

三人は、 チュートリアルミッショ^ンンが行われる、 アーネンエルベ^G地区^{コロシアム}。闘技場^{コロシアム}へと、 向かつた。

もちろん今回もスピードランニングを使って。

第三話

第三話 「チュートリアルミッション」

三人はコロシアムにたどり着くと、コロシアムの受付に行つた。受付にはNPCはいた。相変わらず、普通の人間と変わらない容姿で、少し変な感じがする。

「すみませんが、ただいまチュートリアルミッションは三パーティ一街です。訓練室で少々お待ちください。順番がきましたら、ホールをして、無料で転移させていただきます」

「どうやら、すでに三つのパーティが来ていたらしい。どうやら、チユートリアルミッションはパーティずつしか受けられることができないうらしく、待たされるはめになってしまった。

訓練室はそこそこ広い部屋で、武器魔法の使用可能エリアだった。

「ここで少し練習するかな」

そう言って、ハヤテは背中のホルダーにさしていた、剣を抜く。もちろん、初期装備の銅の剣だ。

「そうだね。敵は出てこないけど、一応感覚だけでも掴んだほうがいいよね。剣とか振り回す機会、現実ではないからね」

マナは苦笑いをしながら、細剣を取り出す。まあ、実際疾風は現実で剣道をやっていたので、竹刀なら振り回したことはある。しかも、一回振ってはないが、真剣を持ったことがある。あれはずしっとし

て重かつた。それに比べると、銅の剣は軽いほうとこえる。

「まあ、やっぱり軽いとはこゝえ両手で持つたほうが安定するのかな……

・・・・

ハヤテは両手で剣を持ち、軽く振るひ。両手で持つとあまり激しい動きはできないが、太刀筋は安定する。

「うわあ。うまいじやん。現実で、剣道でもしてた?」

鋭い勘でコウナは言い当てる。まさにその通り。

「よく分かったな。剣道やってたんだよ。ちょうどだけだけどね

横では、マナが細剣を使っていた。見た目からしても、軽そりでどちらかというと、振り回すというより、付き攻撃のほうだろう。刃はあまり鋭そうではない。鋭いのは先端部分。

「軽いなあ。こんなに軽いもんなんだー。細剣は振りやすいけど、めんどくさそうだなあ。やっぱりや、こくらパソコン版で強くても、こっちじゃ身体能力とかも関係していくよねー」

確かにそうだ。パソコンだと、キーボード（もしくはゲームパッド）を使って操作するだけでいい。練習さえすれば、うまくなる

しかし、VRだと、自分の身体能力も関係していく。ファンタジー風に身体能力は、補正されるようなのだが、やはりとの身体能力が高い人・・・・または、疾風のように実経験が多いほうが、強いのではないだろうか・・・・。

「まあ、私は魔法だから、あんまり関係ないかなあ。武器といつのは初期ではもつてなかつたし。装備されてたのはこれ」

ユウナが取り出したのは、一冊の古びた本だった。

「それは？」

「ん、これ？魔法の呪文とかが書いてある本。覚えれば、別になくてもいいんだけど、最初はね。まあ、まだ一ページしかかかれてないけど」

「どうやら、魔法を覚えることに、追加されていくらしい。覚えれば必要ないということは、魔法職においては、記憶力も大切になってくるようだ。」

「ていうかさあ。初期の魔法が『スピードランニング移動力上昇』と、『ライトニング』ってどうよ。こんなんじや、たたかえないよ」

確かに、どちらも基本的にはサポートの魔法だ。移動力上昇は論外、ライトニングも攻撃力はあるが、それは微々たるものだ。いいことといえば、数パーセントの確率で、『麻痺』が付加されることぐらいだろうか。

ユウナが愚痴を言いながら、なぜか訓練室においてあつた狸の信楽焼きに対してもライトニングを使おうとした時、システムメッセージが聞こえてきた。

『大変お待たせいたしました。順番がきましたので、コロシアムに転送をいたします。転送が完了し次第、ミッションは開始されます。準備はよろしいでしょうか？』

三人は顔を見合させて頷く。

『では、転送します。』

いきなり三人の足元が光りだした。青白い光。その光は次第に大きくなり、床に大きな魔法陣を形成した。刹那、魔法陣がフラッシュする。

「　　」

目もぐらむような強い光。同時に体が浮くよつた感覚。

つぎ、目を開けるとどこか広い場所にいた。

「ここは……？」

「クロシアム……かな」

周囲も見ると、自分たちがいる大きな場所を取り囲むように、観客席のようなものがある。ちょうど、野球の球場みたいだった。

システムアラート・ミッション、「チュートリアルミッション」を開始します

目の前に、そんな文字が浮かび上がったと思うと、三人を取り囲むように、十数体のゴブリンがあらわれた。まず、その再現度に驚いた。VRの中身はグラフィックといつていいのかはわからないが、

緻密に細部まで細かく作り上げられたグラフィック。あきらかに、現実には存在し得ない獣人。モンスター

そのグラフィックに一度感動し、遅れてその数に驚く。

「ちょ、ちょっと。数多くない！？」

数えると、十七体もいた。ゴブリン達はまだ、こちらの様子を窺うように動かない。

「ちょっとこれはきついかもな」

いかにそれが一番弱い敵ゴブリンだとしても、数が多くれば話は別だ。塵も積もれば山となる。ゴブリンも数があれば、正真正銘の強敵だ。

「まあ、冷静に行けばいいけるよ」

マナが静かに言つ。

「ユウナ、SDかけて」

「了解！」

ユウナは素早く呪文を詠唱。SDを自分を含めた三人にかける。

それと同時にゴブリンが解き放たれるように襲い掛かつてきた。

「避けて！」

周囲に逃げ道はない。三人はそれぞれ飛んだ。VRにアシストされ、

現実の二倍ぐらこの跳躍。おつまつと、ゴブリンの輪の外に抜け出る。

「ライトーニングー！」

ユウナが叫ぶと、ちょうどゴブリンたちの輪の中心にバチッと電撃波が飛ぶ。ゴブリンたちは一瞬、しごれたように叫んだが、再び襲い掛かる。

「やっぱ麻痺しないか」

ユウナは歯をかみながら、身をひく。

「私がライトーニングで援護するから。一人ともよろしく！」

「オーケー

「わかった

マナとハヤテの二人は前に跳んだ。SDの効力で足が速くなっているため、ものすこいスピードでゴブリンの群れにつっこむ。

「つまつまつかつかー！」

横に一閃。五体のゴブリンが吹き飛ぶ。しかし、次のゴブリンが飛び掛かる。

マナは細剣でゴブリンを攻撃するが、多數戦には向かず、苦戦している。

「だめ。これじゃラチがあかない。私も補助スキルがあるから、ハ

ヤテ、任せたつー。

「え、ちよつ。まつ

」

そう言い、余所見をした瞬間、「ゴブリンがものす」とストレートをハヤテに向かつて打ち出した。

「ぐつ

疾風は何とか倒れずにすんだが、態勢が完全に崩れた。さつさ吹き飛ばしたゴブリンも一緒になつて、十七体が同時に飛びつく。

「うわつー。」

思わず目をふさいでしまつたが、次の瞬間、

「ライティング！！
バチツ」とあたりがフラッシュュした。

目を開けると、まわりでゴブリンがもだえていた。どうやら『マヒ』しているようだ。

「コウナー！？」

ハヤテはコウナのほうを向いた。コウナは何も言わずに、ただ真剣に呪文を唱えている。そのたびに辺りがフラッシュュし、ゴブリンのHPが削られる。

あきらかにさつさめでのライティングとは違つた攻撃だった。どうじつことだらひ。

しかし、そんなこと考へてゐる暇はない。せつかくいま、「ゴブリンは麻痺しているのだ。

「セハイ！」

剣ふるい、ゴブリンたちをなぎ払つていく。

「後ろ！」

「つ！？」

ぱつと後ろを振り向く、そこには大型の「ゴブリン」がいた。「ゴブリンたちを束ねる、『ゴブリンチーフ』だ。ゴブリンはその大きな爪を持つた手で、ハヤテを掴み上げた。

「グツ・・・・・・・・」

「ハヤテ！！」

マナは叫び、ハヤテのほうへ、「ゴブリンチーフのもとへ走った。剣を引き、思い切り、ゴブリンチーフの背中へとめがけて突き出す。

「ハアアアアア！」

グシリという肉を突き刺す音。ゴブリンは雄叫びを上げながら、倒れた。ハヤテは開放され、地面へとたたきつけられる。

「ウッ・・・・・・・はあ、ハア・・・・・・・あぶねえ。死ぬかと思った。VRとはいえ、こええ・・・・・・・あんなのが間近にいると。すごく怖い」

ゴブリンチーフは、ポリゴンの欠片となつて、四散していく。それ

と同時に残っていたゴブリンたちも、黒い霧となつて消えていった。

「今のは・・・・・?」

「ゴブリンとはいって、ゴブリンチーフは確かランク3のモンスターだ。すくなくとも、低レベル層で一発で倒せるはずもないのだが・・・・・・。

マナは剣をしまいながら、

「あれはね、一レベで覚えるスキルの『アサシネイション』。なんていふかな。使用中に敵を見ると弱点が見えるんだ。弱点といつても、何個かポイントが出て、そのうち一個なんだけど、今回は運がよかつたね」

「そんなこといつたって、弱点ついた程度では死なな・・・・・・・・・・・・・・

「ま、わたしのHンチヤントもあつたし」

ユウナはいつの間にかハヤテの隣にいた。

「BICOはや、リアルタイムで経験値たまって、レベルも上がるんじゃん?さつきハヤテがゴブリン7対ぐらいい倒したところでも実はもう、三レベになつてるんだよ?」

「えつ?」

ハヤテは驚き、自分のステータスを確認する。・・・・・・・・確かに今はレベル4だった。

「Hンチヤント?は一レベの呪文だし、それにたぶんマナは運がよかつたんだよ」

「運・・・・・・?」

「そそ、運」

マナは頷きながら、ハヤテに説明した。

「アサシネイションのもう一つの能力。弱点をつまく突き当てた時に約一パーセントの確率で、敵が即死するんだ。まあ、ランク3までの敵にしかきかないけどね。それにしても、本当運よかつたよ」

セツニヒとか、とハヤテは納得する。

「システムアーネート・ミッションをクリアしました。クリアタイム：1：23.3。ミッションスコア：1412。報酬として1412Y\$を差し上げます

ヒコンとこう音がして、再び転送された。今度は、ロロシアム入りロボ。

「おわったねーーお金もだいぶたまつたし武器とか買い物に行こう!」

ゴウナは嬉しそうに飛び跳ねている。

「やうだね。武器やは確か・・・・・・B-19地区だったと思つよ」

「んじゃあ、行くか。つかれだし、歩いていい」

三人は「ロシアムを後にし、B-19地区の武器屋へと歩き出した。

「ロシアムの観客席では、一人のプレーヤーが、三人を見ていた。一人は西側に座っていた。あきらかに初期装備ではない、黒い外套に見を包んだ男。

もう一人は、男の真反対に座っていた。気弱そうな顔の少女。少女は、疾風をじつと見ていた。ハヤテがゴブリンチーフに首をつかまれ、もだえていると、少女ははーとため息をついた。

「やっぱり。へたれね」

少女はその顔と似合わないせりふを言つと、たちあがり、どこかへといった。

第四話

第四話「メインクエスト01：氷雪の怪鳥」

ベータ版のテストが開始されてから、現実時間で既に、五十分がたつていた。ゲーム内の時間で、約半日が経過していた。

ほとんどのプレーヤーは、だいぶVRでの操作に慣れ、さっそくフィールドダンジョンでの、レベル上げを行っているパーティもいくつかあった。

新しい装備を身につけたハヤテたち三人も、ランク1マップ「薄闇の森」で、レベル上げを行っていた。

「セイツー！」

ハヤテの剣を振る様も、なかなかよくなってきた。マナは、ハヤテと比べ、まだまだ上手ではないが、確実に敵を倒していく。ユウナは、その職 자체が今のレベル帯だと、戦闘に向いてないので、専ら二人の支援だ。

ハヤテたちの周りを取り囲むように白い光が一瞬フラッシュし、レベルが上がったことがわかる。

「ふう。やっと10レベルかあ」

「だね。レベル10まで半日かかるとは思ってもなかつたよ」

空は、茜色に染まり始めていた。ゲーム内では、まもなく夜になる。

「普通のゲームだと、敵一體に、何秒かしかかかりないけど、VRだとそうはいかないね」

モンスターたちの動き 자체、現実の生き物を元にして、成功に作られている。さらにその、AIは、緻密に組まれ、なかなか手間がかかる。

ふと、前方に、開けた場所が見えた。今まで、薄暗い森の中だつたが、そこだけ木がなく、紅い光が差し込んでいる。

「…」

範囲的には狭かつた。まるで秘密基地のよつなそれは、森の中から隔絶された場所のように思えた。

「あ、ホラみて！ あそこー。」

ユウナが叫び、ふたりは指差す方向を見る。

「あ、あれ」

「アーティスト・オブ・ザ・イヤー」

指差した方向の木の根元には、十輪ほど花が咲いていた。もともと白いその花弁は今、夕明かりに染められ、オレンジ色に光っていた。

「あれって、名前忘れたけど、結構レアアイテムだったよね」

「うん。確か名前は・・・・・、ホウルハートフラワーだったか

な。向こうでは一輪1MYSで取引されてたね

ホウルハートフラーとは、ポーションEXの合成にも必要な貴重な素材。そのほかにも、様々な装備の強化の際に使用すると、いい効果を得られる。しかし、その効果の反面、希少価値がとても高く、生えている場所はランダムで変わり、一度採取すると、同じ場所には一度と生えない。

「これ、とつとこうよ。あとから使えるじゃん。使わないとしても、最悪売ればいいよね」

「そうだな。んじゃ、三人で分けて採ろう。一、二、三、・・・・。
・ん、ちょうど十五本あるな。五本ずつ

ふと、気配を感じた。

「 誰だっ！」

ハヤテはぱつ、と振り向く。

しかし、そこには誰もいない。ただ、暮れなずむ森があるだけ。

「おかしいな。確かに気配を感じたんだけど・・・・・・

「VRって、気配も感じれるの？」

「さあ、わからないけど、感じた気がする。誰かこれを狙ってるかもしれないから、急いで探るわ」

三人は手分けして、ホウルハートフラーを探ると、採集ボックス

に入れた。

「じゃあ、そろそろ戻る?」

マナがそう言つて、空を見上げる。田は、刻々と落ちている。

「だな、コウナ。スピードランニングよりじく」

「オーケー」

森には、夜が降りようとしていた。日が落ちるスピードが意外にも早い。ハヤテたいがいたのは森の最深部に近い場所。森を抜けるのにはなかなか時間がかかる。

途中で、何体かのゴブリンに遭遇したが、ほとんどを無視して駆ける。こんなに急ぐのはわけがある。夜。森のステージにおいて、夜は危険だ。第一に、光がなく周りが見えない。第二に、敵モンスターが夜型のものに変わる。パソコン版の経験から言つても、夜に出てくるのは、手ごわいモンスターが多い。光属性の魔法や武器があれば、大半は闇属性なので楽なのだが、初期では光の魔法は手に入らない。何とか夜になる前に抜けてしまう必要があった。

森を、完全に抜けた時には既に辺りは真っ暗だつた。アーネンエルベの街は、灯りがともり、綺麗だつた。

「ふう、やつと戻ってきたね。疲れたよ」

「だつてさ、ここからさつきいた場所まで、現実換算で二十キロメートルだよ。アシストがなかつたらやつていけないって……」

「

三人はそれから、ユウナの部屋に向かうことにした。ユウナの部屋は、ハヤテの部屋の真上だつた。部屋手の部屋より、いくらく大きいやうな気がするのは気のせいだらうか。

「今日は本当、疲れたね」

ユウナはベッドに「ゴロ」と転がり込む。

「今日は、って言つても、現実ではまだ一時間ぐらゐしか経つてないんだけどね」

「むう。確かに。本当にいつかになると、時間感覚すれちやうつよ」

「なあ、今日採つたホウルハートフラワーは倉庫に入れとこうぜ。倉庫には確かかぎかけられたり、手持ちよりは安全だろ」

「そうだね。全部ここに入れていいよ」

ユウナはベッドから飛び起き、倉庫を開ける。三人の持つてた鼻をすべてそこにあさめ、ユウナがパスワードをかけてロックした。

と、ちよづきその時。

ピー。メインクエストが発生しました。

視界に、クエストウインドウが現れる。

『皆さんこんばんわ。AIです。メインクエストが発生しました。

メインクエスト01：「氷雪の怪鳥」。最近、夜になるとこの付近

の万年雪の山で、怪鳥が現れ、その山周辺の村人に被害が起きます。プレーヤーの皆さんには、アーネンエルベから西に向かつたところにある山の、Hアレーズングという街で情報を集め、怪鳥の討伐を行つてください。このクエストは期間付きです。期間は一夜。二夜以内に、討伐が完了しますと、全員に報酬が入ります。また、討伐をしたパー・ティーには特別な報酬があります。エアーズングの街には、アーネンエルベD・8地区の共用ポータルより、テレポートできます。共用ポートたるは通常、5000Y\$かかりますが、今回のクエスト中は無料となります。それでは、ご健闘を祈ります』

クエストウイングウが勝手に閉じ、かわりに田の前にはひらひらと、一枚の紙が落ちてきた。

「なんだ?」これ・・・・

手にとると、それには「共用ポータル無料券」とかかれていた。

「これ使えば無料なんだ。なるほどね」

「ねえねえ、マナ、ハヤテ。さつそく行かない?早くいって狩つて、『特別な報酬』もらっちゃおうよ」

コウナはせかすよつて、一人のほうを見る。

「あ、でも、その前に防寒服買つておいたほうがよくなない?」

「やうだな。雪降つてんだる、そこ。防寒服ないと、きつこかもな。この世界、ちやんと温度も感じるし、凍え死んじゃつかもよ?」

「あ、そうか。んつじや、防具屋にまず行くつ?」

三人はユウナの部屋を出ると、D・5地区にある、防具屋へと向かつた。店に、客は一人しかいなかつた。みんな、さつきのアラートを聞いて、出かけてしまつたのだろうか。先を越されなければいいな、とハヤテは思ひながら、防寒服を手にとる。

もちろん、防寒服といつても、戦闘時に動きやすいよつなもの。

ユウナもマナも同じものを手にとる。最初のほうのレベル帯では、防具にほとんどバリエーションがない。あるといえば、多少の色のちがいでいど。しかもこの防寒服は白の一色しかなかつたので、みんなおそろいだ。

ユウナとマナが先にNPCのいるカウンターで支払いを済ませ、ハヤテが後に続き服をレジに出そつとした時、ふいに肩をたたかれた。誰かと思い、後ろを向くと、いたのは男女の一人組み。女のほうは、メガネをかけていた。二十歳ぐらいだろうか。アバターだから年齢はなんともいえない。軽防具を身につけ、腰に剣をさしているところから見ると、どうやら剣士のようだ。

もう一人、女人の後ろに隠れるようにいた男・・・・男の子は、気弱そうな顔立ちで、どっちかといふと、ハヤテ同様、女性よりの顔。服装からは職はわからなかつた。

「あの、なんですか？」

ハヤテが聞くと、女のほうが口を開いた。

「あ、いきなりすいません。あなたの達はこれから、エアーレーズ

ングに行くんですね？」

丁寧で聞き取りやすい、ニュースキャスターのようなしゃべり方。でも、どこか柔らかさを帯びたその声は、心地よく耳に響いた。

「あ、はい。そうですよ。それがなにか？」

「いえ、わたし達も行こうと思つたんですが、わたし達、知り合いがお互いしかいなかつたんで、パーティーが組めなかつたんですよ。一人でしか。一人じゃ、メインクエストなんて、心配なんで……。・・・、できたらパーティーに入れてもらえないかと・・・・・・」

ハヤテ、マナとユウナに目で問い合わせる。一人とも、べつにいいんじゃない?と返す。

「あ、大丈夫ですよ。パーティー組むならついでにフレンド登録もしどきましょ。Fパーティーが組めますし」

ハヤテが言うと、女は嬉しそうに手を合わせ、

「本當ですか!嬉しいです!わたしの名前はリサといいます。職は剣士です。よろしくお願ひします。あ、そしてこっちが、」

そう言って、リサは後ろに隠れるようにいた男の子を前に出す。男の子は困ったような表情になり、どうしたらしいのか分からなくなつたのか、顔を下げた。

「すみませんね。現実のことはあんまり言つたらいけないって言われてるんですけど・・・・・・これわたしの弟なんです。ジュンつていいます。職はヒーラーです。人見知りなんですが・・・・・・仲良くしてやってください」

ジユンは軽くお辞儀をした。

しかし、顔がゞいつも幼く見える。VRとこづ世界上、十五歳以上な
のだろうが、ゞいつもせつま見えなかつた。まあ、気にしない」とこ
しておく。

「俺の名前はハヤテつてこます、職はバーチャルです」

続いて、マナとコウナも血口紹介をする。

「わたしの名前はマナ。職はソラ。よみじくわ
「わたしなコウナ。ワニだよ。よみじくわ」

「よみじくわ願いします」

リサは丁寧に頭を下げた。

ハヤテは会計を済ませると、全員のまつ毛を直つた。

「じやあ、わつべく行きますかー」

「うんー」

「がんばりー」

「はい、行きましょー」

「……」

ジユンも何か言おうとしたらじこが声は出なかつた。

五人は店を出ると、共用ポータルへと向かった。

第四話？

「エリがエアーレースングの街…………」

暗闇の中、街灯りに照らされた雪の道。元は石畳なのだろうが、今は雪が五センチほど積もっている。

「結構寒いですね」

リサはハーアーと、白い息をはいた。

正確にはわからないが、おそらく気温はゼロ度をゆうに下回っているのではないか。防寒具を着ていなかつたら凍え死んでいたことだらう。

「さて、どうじよつか。まず情報を集める? A-Iもわざわざてたし^{アイ}」

「やうだね。マナの通り。手分けして情報集めようよ。夜は遅いけど、NZCだから大丈夫でしょう」

「だな」

「じゃあ、わたし達は…………、向いの家のほうへ行きます

「んじゃ、わたし達は…………、向いの家のほうへ行きます

「じゃあ、ハヤテはそこ教会^{プロシク}ネ

「そうだね」

そう言い残して、四人はそれぞれ行ってしまった。

一人残されたハヤテ。小さくため息をつき、振り向く。

ポータルのすぐ後ろ。そこには、大きな教会があった。灯りが下のほうから照らしているせいか、とても無気味に見える。教会の窓からは、光がこぼれていた。どうやら、中には人がいるようだ。

ハヤテはゆっくりと教会のドアを開けた。ビューッ、と風が吹き抜ける。

教会には数人の人がいた。おそらくは普通の洋服を身につけているので全員NPCだろう。イスに座り併んでいる（？）ようだった。

ハヤテは入り口から一番近いところにいた男に声をかけた。

「…………」
「そうそう。最近なたまに、夜になるとどこからともなく獣の叫び声が聞こえるようになつたんだ。でな、朝起きると、どこか家が壊れてる。まるで、爪で抉られたようにな。まだ、人間へは被害でねえけどな、いつ出るか心配だ。本当に怖いよ」

「それで……、その怪物といつのを見たことは……？」

「？」

「ああ、俺はねえよ。でもな、街のセラフィーっていう若い女が姿を見たそうだ。俺は本人から聞いてないから知らないけどな。一度会つてみろよ。街の一番外れ東の森の近くに住んでるからな」

「はい、ありがとうございました」

「二月二月、一二一〇ノルノルナホ」

ZPCと会話
という、なんだか違和感のある会話を終えると、

「ああ、夜の怪物でしょ？なんだかうわさによると、でっかい鳥だそうですよ？」

「僕、最近この街に来たばかりなんだ。でも、なんか変なのが
るみたいだし・・・・・。また引っ越そうかな・・・・・・」

「まあ、」んなどころかな

ハヤテは教会から出ると、辺りを見回した。まだ、四人は戻つてきてないようだつた。さつきいた、セラフィーという人のところに行くのは、みんなが戻つてきてからのほうがいいだろう。

それにしても、

現実と同じように感じて、現実とおなじように動ける。

でもこれは、現実ではない。仮想なのだ。やはりそこにまだ、違和感を感じてしまつ・・・・・。気にしそぎだらうか・・・・・と
ハヤテは小さく首をかしげる。

「おーいハヤテー」

ふと見ると、マナとユウナが帰ってきた。ほぼ同時に、リサビジュンも戻ってきた。

全員がそれぞれの聞いてきた情報を言い合つ。しかし、たいていどれも似通つたものだつた。一番有力そうな情報は結局ハヤテのもだつた。

「それで、そのセラフイーって人はほどこに住んでるの？」

「ああ、えーと、たしか、東の街外れの森の近くだそうだ」

「なるほど。じゃあ、そこに行きましょうか

五人はさっそく、セラフイーが住んでいるらしい、東の街外れへ向かつた。

「…すみませんがこのページ本当はセラフイーと話す後までにするつもりだったんですが、ちょっと時間の関係でここまでにして、続きは次のページへ移します…」

森は暗かつた。

当然の如く森には明かりは無い。ところどころ差し込む月光が、唯一足元を照らす光だった。

三十分ぐらい歩いただろつか。前方に小さな家が見えた。

「あ、あれじゃない？そのセラフイーって人の家」

「ああ、だらうな。てか、これじゃもう、森の近くじゃなくて森の中だよな・・・」

その家は木で作られたログハウスのようなものだった。

いくつか窓はあるが、そのいずれも閉まつていて、部屋の中は明かりが灯つている様子も無い。寝ているのだろうか。B.C.O内の時間は真、深夜0時を回ろうとしている。たしかに、人なら寝ていてもおかしくない時間なのだが、N.P.Cが寝るっていうのも・・・なんだかおかしい。

ハヤテは玄関の扉をノックした。

「すみません。誰かいりますか・・・？」

「おーい
反応は無い。

さうに強く叩く。すると、いきなりドアが開いた。つり開きではなく、外開きだったため扉が思いつきり疾風の顔面に直撃した。しかもなぜかドアに当たり判定があった。微妙な量のHPが削られる。

ハヤテが顔を抑え悶絶していると家のなかのんきな声・・・。
いや、眠たそうな声が聞こえてきた。

「ふわあーい。だれですかあ？ むにゅ・・・・」

田を「じじ」と「すりながらあらわれたのは小さな女の子だった。
しかし、

「わあ、エルフ族だ」

「ほんとだ、はじめて見た！」

ユウナとマナが思わず声を上げた。

その子の耳は先がとんがつていて、背中には薄く透き通った可愛らしい羽が生えていた。

「えるふ・・・ひやい。えりゅふですよ～～。むにゅむにゅ」

今にも眠ってしまうような声。こいつまでもが眠たくなりそうだ。
やつと、ドアの反動のダメージから回復したハヤテはエルフの女の子に聞いた。

「君がセラフイー？」

すると、さつきまで眠たそうだった彼女はいきなり大きな声で

「はい！わたしがセラフイーです！なにかよつじですかー？」

「どうぞと聞きたい」とあるんだけど

「ちよっと聞きたい」とあるんだけど

「なんですかー？」

田は覚めてみたいなのだが、のんきな口調は変わらない。なんだか、調子が狂う。

「……えーと最近この付近で何か無かつたか？」

「何か……ですかー？えーと、そうですねー。あーです。です。ありましたー」

「なに？」

「はいー。スノーウルフの喧嘩ですよー」

「へ？喧嘩……？」

スノーウルフとは、雪原地帯のマップにしか出現しない固有種族で稀に、雪山から降りてきて、じついう場所にも来るといつ。凶暴な性格で人を襲う事もあるらしいが……今回のクエストとは関係の無いような気がする。

「多分……それじゃないよ。えーと、」

「最近たまに、夜になるとビービーからともなく獣の叫び声が聞こえる

よくなつた、って聞いたんだけど、その獣の正体をあなたみてない?」

ハヤテじゃなかなか伝わらずに、代わりにマナが訊いた。

「ああ、そのことですか? ハイ、見ましたよ。あれはグリフォンですねー」

「 「 「 「グリフォン・・・?」 「 「 「

ジュン以外の四人は同時に首をかしげる。

別に、グリフォンを知らないというわけではない。

ただ、ありえない。

グリフォンというのは、獅子の体に鳥の顔という伝説の動物。グリフォンは通常、雪山の頂上で暮らしている。絶対にこんな場所まで降りてくる事は無いのだ。

「それ、本当なの?」

「ですよ。見間違える事なんてありません! · · · · · あ、ほらあれですよ」

セラフィーはハヤテたちの後ろを指差す。

あれって · · · · ·

五人はゆっくりと後ろを向く。

「おー、おー、冗談だろ・・・」

居た。

その姿はあきらかにグリフロン。

大きさは差ほどでもないが、凶暴なグリフロンに違には無い。

グリフロンは雄たけびを上げる。超音波のように高い音が耳につく。

ハヤテたちはとつてに耳をふさぐ。

「う。これ、やばい、動けないぞ・・・」

「あの雄たけび、麻痺作用もあるみたい・・・」

「誰か麻痺治し持つてないんですか?」

「持つてるわけ無いよ、だつてあれまだ手に入らなかつたアイテムじやないもん」

「じゃあ、ここで一旦死ねと」

「もうこいつだね、諦めようよ」

グリフロンは動けなくなつたハヤテたちに向かつて突進をする。

(つづ)

攻撃が当たる寸前、急にハヤテの意識は引き剥がされるように闇の中へと解けていった。

設定資料？

BCO クラス
職紹介1

ヴェサテリーネソルジャー（VS） 通称：ソルジャー 和名：万能剣士

剣などの武器から、中級の魔法まで使いこなす万能剣士。様々な種類の技を使用でき、初心者に人気があるが、逆に突出した能力が無いため中盤以降で使いこなすのは厳しい。

（能力値は上から順にSS、S、A、B、C、Dの6段階評価）

体力：A
MP：B
俊敏度：B
物理攻撃力：A
物理会心：C
物理防御：B
魔法攻撃力：B
魔法会心：C
魔法防御：B

ヒーラー（HER） 和名：回復師

キャラクターの体力やMPの回復をする、回復のエキスパート。しかし、本人自身は防御力が低く打たれ弱い。レベルが上がれば、状態異常を直すことの出来るスキルも覚える。

体力：D

MP : SS

俊敏度 : C

物理攻撃力 : C

物理会心 : C

物理防御 : D

魔法攻撃力 : B

魔法会心 : A

魔法防御 : C

あまたの種類の剣を使いこなす、剣のエキスパート。俊敏度、物理会心が高く、一気に攻め込み勝つ。また、能力強化の低級魔法も扱える。

ソードマスター (SDM) 和名 :

体力 : B

MP : B

俊敏度 : S

物理攻撃力 : A

物理会心 : SS

物理防御 : B

魔法攻撃力 : C

魔法会心 : C

魔法防御 : B

ウィッチ／ウイザード (WIC/WIZ) 和名・魔女／魔法使い

魔法を主として戦う。武器の扱いは苦手だが、魔法の攻撃力で十分カバーしている。このクラスは特殊クラスで一定の条件を踏まないと転職できない。

体力	：	C
M P	：	S S
俊敏度	：	C
物理攻擊力	：	D
物理會心	：	D
物理防禦	：	D
魔法攻擊力	：	S S
魔法會心	：	S
魔法防禦	：	C

第5話 ?

暗闇。

「ど」「見てもただの黒。上も下も左右すらも分からぬ変な空間。
そんな空間にハヤテは浮いていた。

System Alert

田の前に、赤い文字が浮かび上がる。それで、ようやく「J」がVR
空間の中だといつとこ気付いた。

システムに重大なバグ（障害の事）が発生したため、BCO
を強制終了します

どうか、バグか。

ハヤテは納得した。今ハヤテがプレイしていたBCOがベータ版。
要するに、お試し版という奴だ。開発途中であり、こいつたバグ
が起きるのも当然だ。

VRの神経接続及び、シャットダウンを開始します

再び意識が薄れしていく。

・・・

目が覚めた時には、疾風はベッドの上で寝ていた。上体を起こし、

辺りを見回す。すると、榎の顔が目に入った。

「だいじょうぶかい？すまないね。システムにバグが発生してVRを強制終了したんだ」

「そうですか・・・。バグって、何が起きたんですか」

「いや、それは今調査中だ。おそらく、大分かかるだろ。本田のテストはこれで終わりということになるかもしない」

「そんな・・・」

と、疾風は立ち上がる。しかし、体が上手く動かず倒れてしまつた。

「VR酔いだよ。VRに慣れてない人には、よく起きる事だ。十分に体を休めてくれ。それと、」

榎は疾風に一枚のチケットのようなものを手渡す。

「これは？」

「ああ、これはレストランの無料券。この近くに、レストランがあるんだが、今回のテストを受けている人は無料で食べられるんだよ。期間中なら何回でも使えるから、是非使ってくれ。ああ、でも、別に強制じゃないから、他の店に入つてもいいし、コンビニで買つてもらつてもかまわない」

「そうなんですか。ありがとうございます」

「いやいや、」アリシア

榎はそう言つと、体調が戻つたらホテルの方で自由にしていてくれ、
と言い残して部屋を出て行つた。

第5話　？（後書き）

今回はとても短いですが、気にしないで下さい。第6話から本格的に話が動くんで^ ^・^ ^これからは長くなると思います。

第5話？

結局、あれから疾風はやることも無く、ホテルの用意された自室へ戻つてきいていた。部屋には、パソコンも備え付けられており、BOも出来るという事だが、やらないことにした。せっかく、VR版をやつているのだから、そつちを考える事に専念したい。

今回はバグの所為で全然プレイが出来なかつた。しかし、収穫は色々あつたし、楽しめた。

まず、VR内では体が軽いという事が分かつた。筋力とかもいつも違つ氣がするし、システム上でアシストしているのだろう。とはいっても、剣を振り回したりするのはやはり本人。いくら、PC版で上級者といえる人でも、すぐ使いこなすのはまず無理だろう。おそらく、テスト時間内でも慣れる事の出来ない人もいるはずだ。

さいわい、疾風は剣道をやつている。いくら、竹刀を振り回すのと剣を振り回すのとでは違つとはい、経験がない人よりはいいはずだ。

マナとユウナはどうだらう。ユウナはW.I.C.^{ウイッチ}だからともかく、マナは剣を振り回さなくてはいけないはず。最初やつたチュートリアルミッションを見た限りでは、問題はなさそうだ。

疾風はベッドの上に横になつた。

今は正午。VR内では半日ぐらい時間が進んでいたが、実際ではほとんど進んでいないことに違和感を感じる。これじゃあ、製品化したときに『時差ぼけ』とかも起きるだらうな、とかどうでもいいこ

とを考へながら疾風はなにをするわけでも無くただ天井を見続ける。

ふいに、お腹がなつた。

そつこえは、朝じはんは適当にしか食べていなかつた。でも、BCO中はじつとかプセルの中にいたのに、何故お腹が減るのだひうか。やはり、VR内で動くと疲れるところとか・・・。

疾風はベッドから飛び起きた。

「・・・・、コンビニでも行ひつかな」

一応、お金はそこそこ持つてきている。レストランの無料券もあるが・・・・、畠からレストランで食べるよつな気はしなかつた。

「夜はレストランで良いかな」

コンビニには確か、このホテルのすぐ近くに一軒あつたはずだ。そうだ、ついでに古本屋かゲームショップか何かを探して、暇つぶしでもしよう。

疾風はそつ思いながら、部屋を出た。

「ねえ、ちょっとこい？」

ホテルを出ですぐ、後ろから呼び止められた。

そこにいたのは自分と同じくらいの歳の少女。ふと、疾風はこの少女を見た事があるような気がした。しかし、どこで見たか、誰なのかはわからない。

長く、さらさらとしたきれいな黒い髪。疾風には女子の服装の事はよく分からぬが、それが流行のものだという事だけは分かった。

「えっと……誰？」

「私？私は早川真波つていうの。ま、そんなことどうでもいいじゃん？ ところで、君、BCOのテスト参加者なんでしょう？」

「そうだけど……」

他に、考えられないと思う。なにせ、このホテル（ボロ）はBCOテストの参加者の貸切なのだ。入り口に堂々と書いてあつた。

「あなた名前は？」

「え、ああ……。駿河疾風だけど……」

「いつと、真波はやつぱり、と声を上げた。

「まじり、まじり。私。わからない？」

彼女は、自分の顔を指さす。

「ぶりからして、どうも知り合いのようだが……、疾風には思い当たる人物がいない。　ん？　真波……？」

「まな……、み。BCO……。」

「え！　もしかして、マナ？」

「う」答へ。

真波は嬉しそうに手を合わせる。

「せつ、君が部屋出でくるときに私もひょいと部屋でたんだよね。部屋真横なんだよ？　それで顔見たら、BCOでよく見かける顔に似てたから。君って、BCOのアバターにそっくりだね」

いや、逆だろ。

「そつか。君が、あのマナかあ。まあ、そっちも結構てるんじやない？　髪型とかはね」

「わうかな」

「うふ。えーっと、そうだ。早川さん……、なんて呼べばいいかな？」

「うーん。マナでいいよ。そっちの方が慣れてるでしょ？」

「うーん

もじつくつくるからや」

「といひで、マナは何で俺に話しかけたんだ？」

真波は街の方を指差した。

「ちょっと、買い物に行こうと思つたんだ。だから、付き合つてくれる人探してたんだよ。せつかくだから、ユウナも探そうと思つたんだけど、いなかつた」

「どうが、ユウナもいるんだな。と、今更思い出す。そのうち、会えるだろ？」

「別に、買い物いってもいいけど、その前に昼飯、食べたいんだけど良いかな？」

「 もうひと。どこで？」

疾風は辺りを見回す。

正午といつともあり、通りはなかなか賑やかだつた。どうもここはオフィス街らしく、あまりこれといった食べ物屋は見当たらなかつた。軽食、ファーストフード関係の店は、少しあつた。

結局、一番近くにあつたハンバーガーショップに入ることにした。店内は客でごつた返していたが、何とか一人分の席を確保する事が出来た。

そういうえば、女の子と一人で食事するの初めてだっけ……、と思い

つつしかし、とくに何か感情を持つことはなかつた。ゲーム内とはいえ、最近一緒に遊んでいたからかもしれない。

食事中、二人は結構話した。基本的にはBCOの事だが……。

「そういうえば、今日のバグは本当にタイミング悪かつたよね。せつかくグリフロンきてたのに」

真波はハンバーガーをむしゃむしゃと美味しそうに食べながら話す。

「そりはいつも、あのままやつてたら結局負けてただろ。デスペナルティが付かなかつた分だけ良いんじやない？」

「ウーン……」

一人は食事を終えると、街に出た。

疾風は真波の後をついていく。

「…………」

真波が立ち止まつた場所、そこはアニメ関連のグッズを売つてゐる店だつた。秋葉原の店だ。疾風がどうも敬遠してゐた場所。疾風は真波の異様なはしゃぎように驚きつつ、店に入つた。

第5話　?
1／2（後書き）

すみません中度半端に書きつてしましました。明日、更新します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0360t/>

Virtual Mind -Bondage Conect Online

2011年8月2日16時59分発行